

九州大学 経済学部 同窓会報

第63号

九州大学経済学部同窓会
事務局 〒812-8581
福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学経済学部内
TEL 092-642-2442 FAX 092-642-2348
mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替 01750-6-21743

目次

平成30年度行事予定(総会のご案内) / 1

追悼文

松浦正純さんを偲んで 鈴木多加史(昭和33年卒) / 2
松下志朗先生の急逝を悼む 原 康記(昭和60年博士入) / 3

特別寄稿

「非中国屋」による文献サーベイ: 中国経済研究の現在
経済学研究院長 磯谷 明德 / 4

支部だより

東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 7
経済学部新卒歓迎会・九大東京同窓会Summer Festaの報告
西原 貴史(平成26年卒) / 8
関西支部 事務局長 谷村 信彦(平成3年卒) / 9
大阪の観光レポート 谷村 信彦(平成3年卒) / 10
福岡支部 副支部長兼事務局長 高木 直人(昭和57年卒) / 11
福岡支部交流ゴルフ会 第62回コンペを開催!
末次 隆(平成2年卒) / 12
水族館経営にチャレンジ! 岡村 卓也(昭和63年卒) / 12
アサヒビール園でサロン会を開催 藤吉 由貴(平成13年卒) / 13
お知らせ / 14

同窓生健筆模様

『旧軍用地転用史論』(上・下)と『ドナウを越えてバルカンへ』の刊行随感
杉野 罔明(昭和33年卒・昭和38年博士入) / 14
『京都企業 - 歴史と空間の産物 -』
徳賀 芳弘(昭和53年卒・昭和58年博士単位取得) / 16

リレー随想

九大の思い出 町野 五彦(昭和32年卒) / 19
私の人生の原点は大学時代 野瀬 義人(昭和50年卒) / 20
ファントム墜落から来年50周年 坂井 智明(昭和51年卒) / 22
大屋ゼミ、浜砂先生の思い出
西村 善博(昭和54年卒・昭和56年博士入) / 24

福岡VS熊本

幸山 政史(平成元年卒) / 25

人物往来～新教員紹介

教授 葉 聡明 / 27
准教授 與倉 豊 / 27
講師 山崎 大輔 / 28

経済学部名誉教授の会 / 29

国際学術交流振興基金執行状況報告(平成28年度)

国際交流委員会委員長 大下 丈平 / 30

平成28年度卒業生就職状況 / 31

九州大学同窓会連合会との覚書の締結につきまして / 33

同窓会役員名簿 / 34 同窓会歴代会長 / 36

同窓会会費納入のお願い / 36

平成30年度行事予定(総会のご案内)

平成30年度の各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。

平成30年度 関西支部総会

日時 平成30年5月19日(土) 15時～
場所 ハートンホテル北梅田
(大阪市北区豊崎3-12-10 TEL(06)6377-0810)
<お問い合わせ先> 関西支部事務局 谷村 信彦
公益財団法人 大阪観光局
TEL(06)6282-5908
E-mail tanimura-n@octb.jp

平成30年度 全国・福岡支部合同総会

日時 平成30年6月8日(金) 18時～
場所 ホテルオークラ福岡
(福岡市博多区下川端町3-2 TEL(092)262-1111)
<お問い合わせ先> 福岡支部事務局 高木・国生
公益財団法人九州経済調査協会内 TEL(092)721-4900
E-mail soumu-02@kerc.or.jp

平成30年度 東京支部総会

日時 平成30年7月7日(土) 17時～(予定)
場所 学士会館 210号室
(東京都千代田区神田錦町3-28 TEL(03)3292-5936)
<お問い合わせ先> 東京支部事務局 吉元 利行
株式会社オリエント総合研究所
TEL (03) 5877-5590 FAX (03) 5877-5859
E-mail toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp(会社)
t29yoshimoto@aol.com(自宅)

平成30年度 広島地区九大法・経同窓会総会

日時 平成30年11月開催予定
場所 未定

追悼

松浦正純さんを偲んで



同窓会関西支部顧問

鈴木 多加史氏

1958(昭和33)年卒

九州大学経済学部同窓会関西支部長を長く務められた松浦正純さん(1955(昭和30)

年卒)が1月30日に逝去された。ご遺族のご意向もあって、同窓会関係者が知ったのはかなり後のことで、申し訳ないことであった。

松浦さんは同窓会関西支部ばかりでなく、同窓会全体についてもその発展に大きく貢献された谷川大介さん(1947(昭和22)年卒)の後を受けて、平成元年から10年までという長い期間支部長を務められた。

関西支部は、経済学部同窓会が昭和50年10月に九州大学法文学部創立50周年を記念して福岡で設立された翌51年11月に他の地域に先駆けて設立された。この時期、大阪を中心とする関西地区では、関西筑紫会という法文系を中心とする卒業生の交流が盛んであり、経済学部同窓会の活動を全国展開するための支部結成の最初になったのである。

この間の経緯については、同窓会関西支部が発行した名簿と合わせて会員の文章を掲載した『なにわのつくし艸』に、故宮川謙三先生(1956(昭和31)年卒)が「関西支部設立のころ」としてまとめてくださっている。また経済学部同窓会報第50号(平成23年5月15日発行)は「九州大学同窓会35周年記念特集」であるが、そこには「座談会 関西支部の歴史を振り返って」が掲載されており、さらに上掲の宮川先生の文章も再掲されている。

こういった資料からも、支部役員の役割の大変さが浮かび上がる。…面倒な雑用を処理し、事務所を提供し、さらに支部役員会の場所も準備しなければならない。支部の経費節減のためには会議室を無償で提供して欲しい。さらに、転勤の可能性がないのが望ましい、ということになる。大阪発送(現日本メールビジネスサービス)社長として大阪で事業をしておられた谷川さんはその条件にかなった、ということであろう。

座談会にあるように、やがて支部長に就任された谷川さんは熱心に同窓会の活動をされ、同窓会の活動範囲を広げられただけでなく、支部の役員会は谷

川さんが用意された大阪環状線福島駅近くの「哲学の部屋」で開催された。やがて谷川さんもそろそろ支部長を引退させてくれ、と言われるようになったが、谷川さんに頼

り切っていた支部役員はなかなか動かなかった。しかしいつまでもというわけにもいかず、第1回から役員を務められた西村政太郎さん(1938(昭和13)年卒、不二製油社長・会長)に相談したところ、やはり支部長はサラリーマンよりも自分で事業をしている人が好かろう、ということで松浦さんを推薦された、ということである。松浦さんは公認会計士で、中央新光監査法人の代表社員をしておられた。

松浦さんも谷川さん同様関西支部のためにつくされた。関西支部の役員会は松浦さんの事務所の会議室に移った。その役員会は平日の夜開催される。皆が仕事を持っているのでそうなるのだが、夜に事務所の会議室を貸していただくのであるからご迷惑をかけていることになる。また会議終了後打ち上げに移るのだが、当時の役員の回想ではサントリーの監査をされていたからか?高級なビールが潤沢にあったということである。

関西支部では、関連の行事として有志による九経会ゴルフコンペを開催しているが、松浦さんはよく参加されていた、とのことである。平成元年の秋から始まった九経会ゴルフの平成2年春の第2回コンペでは2位に入賞されている。参加者によると、ラウンド中は楽しい雰囲気であったが、振りかぶったらタイミングが合うまでなかなか打たれない独特のスタイルでプレーされていたそうで、温厚で慎重なお人柄が現れていた、という。



平成5年9月23日 奥さまと

そういうお人柄であったが、決断されると果敢に行動された。同窓会全体の第4代会長には上記の谷川大介さんが、第5代会長には渡邊彦士さん（1950（昭和25）年卒、大洋鋳機社長）が関西から就任されたが、その間のさまざまな折衝に関西支部を代表して精力的に活動されたと聞いている。

関西支部のもう1つの関連行事は勉強会である。さまざまな講師に講演をお願いするのだが、経費節約上会員にお願いすることが多い。松浦さんは支部長を引かれてからであるが平成18年11月11日に住友

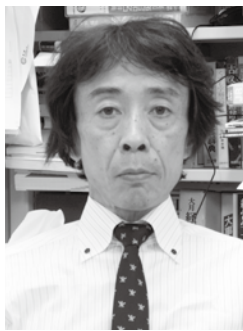
生命つりがね倶楽部で『日本の監査と粉飾について』という演題で講演され、大手監査法人でのご経験をもとに、当時問題になっていたライブドア問題にも言及されて大変興味深いお話であったという。

昨今も東芝問題などさまざまな問題が起こっており、松浦さんのご意見を伺ってみたかったが、それもかなわなくなったのは残念なことである。

同窓会関西支部のみならず、同窓会全体についても多大な貢献をしてくださった松浦さんに感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたい。

追悼

松下志朗先生の急逝を悼む



九州産業大学商学部教授

原 康記氏

1985(昭和60)年博士入

去る3月6日昼、松下志朗先生が亡くなられたとの知らせを受け、大変なショックを受けました。お通夜の席で最後に拝顔した時、ふくよかであられた先生のお顔が、少しスリムになられていたように見えました。

私が松下先生に最初にお目にかかったのは、昭和59年夏に福岡県立図書館と福岡県地域史研究所との合同で、田川市での歴史資料・古文書等の緊急調査がおこなわれた時でした。松下先生は、田川市役所の一室に設けられた調査本部で、各調査員への指示などの仕事を手際良くこなされていました。当時、私は福岡大学の修士課程の大学院生で、この調査の時、諸先生方が旧家を訪ねて古文書等を撮影するという仕事の助手をさせていただくとともに歴史資料の扱い方を学ばせていただきました。そこで松下先生は、「古文書というのは、一般に刊行される本と



は違ってこの世に1つしかないものだから、大事に扱わなくてはならない。たった1枚の古文書によって歴史研究の空白部分が埋められることもある」という趣旨のことを仰っていました。今は私が学生にこのことを教える立場になっています。

私が九大の博士課程に編入学して松下先生に師事することになったのは、昭和60年春のことです。大学院時代のことは、授業内容そのものよりも、それ以外に教えていただいたことの方を良く覚えています。松下先生は、師事された文学部の^{やない}箭内健次先生から、「歴史の研究には能力は必ずしも必要ではない。10年間、地道に研究を続けていれば、1本ぐらいいい論文が書けるものだ」という話を聞かれたそうです。しかし、先生ご自身は、「私は10年も地道に研究するほど根気は続かないから、1、2年で論文を発表した」と謙遜しておられました。

松下先生が学生時代に卒論で取り組まれたテーマは、鹿児島県を例として、「地租改正と農村における階層分解」の研究でした。当時（1950年代後半）はまだ個人情報保護に無頓着な時代で、村役場で戸籍簿を簡単に見せてくれたそうです。その戸籍簿をもとに1万枚ものカードを作って分析されたとのことで、無精者の私からしてみれば、気の遠くなるような作業をされたそうです。

その後、先生が研究職に就かれてから専門的に取り組まれた分野は、日本の近世経済史、特に石高制や一般民衆の経済生活でしたが、後には、日本近代史の中でも研究が希薄であった海外移民の研究にも取り組まれました。先生は常々「歴史の研究者とい



昭和61年秋 九重の地熱発電所見学
前列中央が松下先生、先生の向かって右が筆者

うのは、研究室にこもって本を読んでいるばかりではいけない。実際に現地に赴いて資料に当たらなければ、良い研究はできない」と主張されていました。そしてそれを実践されるべく、ハワイ移民の研究のため、ハワイへ留学されました。また、一方で、国費で学部へ留学して来た外国人留学生を親身になって指導されました。

松下先生は私を含めて、学生からの付届けの類はかたのご辞退されていましたし、退官記念の会なども固辞されました。それは、私のような不勉強者に

「そんな暇があったら、勉強せよ」という意味だったのではないかと、今は思えてなりません。

松下先生は生前、かなりのお酒好きでした。ふだんは沈着冷静な先生ですが、お酒が入ると、我々ゼミ生の背中をバンバン叩いて愉快地話しを盛り上げられたことが思い出されます。きっと今は極楽でおいしいお酒を召し上がっていらっしゃるでしょう。

【編集部注記】次号には秀村選三先生が松下志朗先生の追悼文をご執筆予定です。

特別寄稿

「非中国屋」による文献サーベイ： 中国経済研究の現在



経済学研究院長
磯谷 明德氏

小論は、2017年2月18日に開催された第42回経済学部同窓会関西支部総会での講演をまとめたものである。テーマは、「中国経済研究の現在—「非中国屋」によるLiterature Survey—」といったものであったが、講演といっても、2012年あたりからここ5年くらいの間、大学院で中国人留学生たちとともに、現代の中国経済に関する文献と一緒に読み、私自身も彼ら・彼女らとともに現在の中国経済について勉強しようとしてきたことの報告をお聞きいただいたというにすぎない。本同窓会報においては、本学部を昭和57年に卒業された神田外国語大学の興梠一郎教授による「中国～巨大国家の底流」（『九州大学経済学部同窓会報』第51号、2011年11月15日）がある。中国経済を長年研究されてきた研究者の方々の眼からみれば、全くの素人による文章というお叱りを受けることを覚悟しつつ、当日、お話しした内容の内容を、以下で書き記したいと思う。

・教育研究の国際化：経済学部・経済学府の現状

九州大学では、2016年度からの第3期中期目標・中期計画期間に向けて「九州大学アクションプラン2015-2020」（<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/univer>

city/president/action）が策定されている。その中の「Ⅱ.グローバル人材の育成」では、教育の国際化改革の一環として「日本人学生の海外派遣件数の拡大と海外拠点の機能強化等による優秀な外国人留学生の獲得」が謳われている。経済学部・学府でも、この大学全体のアクションプランに貢献すべく学部と学府において新たな教育プログラムを構築し提供することについては、本年5月15日に発行の同窓会報第62号において述べさせていただいた。学部2年次から履修が始まる経済・経営学分野の高い専門性を備えたグローバル人材育成をその内容とする学士課程国際コース「グローバル・ディプロマプログラム（GProE）」と学府において英語による包括的なビジネスサイエンス教育を実施する学府「グローバル・ビジネスサイエンス・プログラム（GBSP）」がそれである。これらは、2018年秋からの伊都キャンパスでの講義開始に合わせた本学部・学府での新たな取組みということになるが、九州大学全体で見た時の学生の構成は、10年前とは大きく様変わりをしている。講演はこのことを指摘することから始めた。2016年5月1日時点の九大の学生総数は18659名、そのうち留学生数は2089名、したがって留学生比率は、11.2%で、9人に1人が留学生である。10年前の2007年の留学生数は1171名であったから、10年の間にその数は倍増している。また留学生のうち中国からの留学生は1023名であり、中国人留学生比率は5.4%、20人に1人が中国人留学生である。

同じく2016年5月1日時点での経済学部・学府の留学生数は116名で、そのうちの89名が中国からの留学生で、本学部・学府の留学生の圧倒的多数を彼ら・彼女らが占めている。因みに、2016年度の私の大学院講義への出席者は13名（助教を含む）で、全員が留学生。そのうちの12名が中国から、残りの1名がルーマニアからである。講義で使用する言語は

日本語と英語になる。このような環境に日本人学生がいれば、国内にいながら留学気分を味わえる絶好の環境だと思っていたが、ようやく今年になって2名の日本人学生が加わった。このような大学院生の構成のため、私の大学院の講義では、5年前くらいから、前学期には現代の中国経済に関する文献と一緒に読むということをしてきた。2000年代に入って、中国経済についての研究の方法やスタイルに明らかな変化が見られるようになったし、近年、特に2010年代に入ると、中国人留学生たちにとっては修士論文等の研究テーマ探しをするのに格好の、多くの優れた中国経済研究書の出版が続いている。

・改革開放後の日本での中国経済研究

わが国での中国経済研究を代表する研究者の一人である中兼和津次氏は、2002年の中国経済学会の設立総会での記念講演（中兼和津次「わが国における中国経済研究の回顧と展望」『中国経済研究』1巻1号、2003年3月）で、わが国における中国経済研究における変化について、3点を指摘する。①「非中国屋」、つまり「中国屋」以外の中国研究者の増加、②中国人研究者の増加、③中国経済に関する実証研究・分析の増加。その上で、これからの研究の課題として次の3つを指摘した。①日本人研究者の研究成果の英語による海外への発信、②欧米の中国経済研究者との国際共同研究の活性化、③大胆な発想と仮説の提示。これら3つの課題の中の3番目の点については、次に見るD・アセモグルとJ・A・ロビンソンによる『国家はなぜ衰退するのか（上）（下）』早川書房、2013年で、彼らが提示する仮説は、単純な論理から構成され図式的にすぎるとはいえ、「大胆さ」という点では注目に値するものといえる。

・アセモグルとロビンソンによる

＜「包括的な」制度／「収奪的な」制度＞仮説

彼らは、経済制度と政治制度の間には強いシナジー効果があり、両制度のそれぞれに「包括的な」と「収奪的な」ものの2つがあるとする。①包括的な経済制度は、すべての人が参加可能な包括的市場を生み出し、テクノロジーと教育への道を開く。他方、①'収奪的な経済制度とは、社会の中のある集団から収奪し、別の集団の利益をもたらすために設計された制度である。続いて、②包括的な政治制度とは、十分に中央集権化された多元的な政治制度である。他方、②'収奪的な政治制度とは、限られたエリートの手権を集中させ、その権力行使にほとんど制約を課さない制度である。これら経済制度と政治制度との組み合わせは4通り— (①, ②) ;

(①, ②') ; (①', ②) ; (①', ②') —ある。(①', ②)は現実にはありえない組み合わせである。また容易に予想できるように、(①, ②)の組み合わせ、すなわち、包括的な経済制度と包括的な政治制度の組み合わせだけが長期的な持続を可能にする。

アセモグルとロビンソンの共著書において、現在の中国経済を評価した箇所は5箇所ある。その中の1つで、彼らは「中国の独裁的かつ収奪的な政治制度下での成長はまだしばらく続きそうであるが、真に包括的な経済制度と創造的破壊に支えられた持続的成長には転換しない」と述べる。要するに、彼らの眼から見れば、現在の中国経済の高成長は、収奪的な政治制度の下で部分的に包括的な経済制度が導入されたために生じた一時的な現象にすぎず、このままではその持続は不可能だということである。彼らの議論に対しては、A・サグラマニアンによる問題点の指摘がある。サグラマニアンは、縦軸に経済発展の指標としての一人当たりGDPをとり、横軸に民主化の指標（いずれも2009年データ）をとって、主要石油輸出国を除く141カ国を図の中にプロットしてみせた。ほとんどの国が図の45度線周辺に位置するのに対して、中国は左上に、インドは右下にというように例外的な位置となる。アセモグルとロビンソンは、中国はいずれも45度線に近づくはずだと予測するのかもしれないが、たとえそうであっても、中国が30年から40年の間、なぜ抑圧的な政治体制の下で高成長を実現できたのかについて、彼らは明確に答えていないというのが、サグラmaniアン批判である。結局、改革開放後の40年にわたる中国の経済発展をどのように理解すべきなのかという課題が残ることになる。この課題に、日本人研究者たちは、どのように答えようとしているのかについて、以下でみることにしよう。

・開発経済学・比較経済システム論の応用としての中国経済理解

わが国での中国経済研究を代表する1人である中兼和津次氏には、『体制移行の政治経済学』名古屋大学出版会、2010年と『開発経済学と現代中国』名古屋大学出版会、2012年という2つの著作がある。特に後者の著作は、現代中国経済を理解する上での極上の教科書といえるものである。この著作の中で、中兼氏は「中国モデル」と呼ぶことができるものがあるとすれば、それは「開発独裁モデル」と「漸進主義モデル」の混合として捉えることができる。しかし、その一方で、氏は次のようにも述べる。「中国経済の発展過程は、基本的に開発経済学の枠

組みで叙述し、整理することが可能である。…中国の開発経験の多くは、少なくとも長期的に見れば、ほぼ『標準的なパターン』に従っている」「中国は特殊な国ではなく、全体として見れば『普通の』国なのである」と。中国の経済発展は、これまでの標準的な経済学の分析ツールで理解可能だとする中兼氏の主張は強力である。だが、40年にもわたる現代中国の発展経験に「独自性」と呼ぶべきものはないのだろうか。

・現代中国経済の「独自性」：＜「曖昧な制度」としての「中国型」資本主義＞仮説

現代中国の発展経験の「独自性」に着目して、現在の中国経済を「国家資本主義」(I・ブレマー)、「大衆資本主義」(丸川知雄)と捉える見方がある。前者は、中国における政府介入の強さに着目するものであり(*Bremmer, I, The End of the Free Markets: Who Wins the War Between States and Corporations?* Portfolio Hardcover, 2011)、後者は、中国での民間企業の活力に注目するものである(丸川知雄「大衆資本主義：もう一つの『中国モデル』」大橋英夫他編『ステート・キャピタリズムとしての中国：市場か政府か』勁草書房、2013年)。こうした理解に対して、わが国における中国経済研究を代表するもう1人の研究者である加藤弘之氏は、どちらの捉え方も一面的であるとする。政府が強力に支援する国有企業が存在する一方で、民間企業もそれに劣らず勢いよく成長している。これら国有企業と民間企業が激しく競争する中で、産業全体の急成長がもたらされるという現象が中国では数多く見られるからである。

それでは、加藤氏自身は、中国経済の「独自性」をどこに見出すのだろうか。その「独自性」は、中国独自の制度的特徴に求めざるをえない。それが、氏が提起する「曖昧な制度」の仮説である。そして、中国経済を取って資本主義の類型化論に当てはめるとすれば、それは「中国型」、すなわち「中国型」資本主義としか呼べないと主張する(加藤弘之『「曖昧な制度」としての中国型資本主義』NTT出版、2013年；加藤弘之『中国経済学入門：「曖昧な制度」はいかに機能しているのか』名古屋大学出版会、2016年)。この加藤氏の見方に、われわれも同意する。ヨーロッパおよび日中韓の研究者による国際共同研究(*Boyer, R., Uemura, H. and Isogai, A. (eds.) Diversity and Transformations of Asian Capitalisms*, Routledge, 2012)において、われわれも同様の結論を得た。この共同研究において、遠山

弘徳・原田裕治両氏は2000年代半ばのアジア経済について多因子分析とクラスター分析を実施し、中国1国だけからなるクラスターを検出した。明らかに、現在の中国経済は、アジア資本主義の中でも「特異な」存在だということになる。われわれは、この中国1国だけからなるクラスターを「大陸混合型資本主義」と名付けた。

ところで、やはりここで問題になるのは、加藤氏が提起する「曖昧な制度」とは何かということである。改革開放後の中国経済では、2つの異なる領域が重なる領域が形成され、それが「曖昧な制度」の領域となっている。現在の中国では、「計画でもあるが市場でもある」領域、「都市でもあるが農村でもある」領域、また「労働者でもあるが農民でもある」経済主体が形成されている。したがって、計画 vs. 市場、都市 vs. 農村といった西洋流の二項対立の枠組みから中国の現状を理解することには、明らかに限界がある。一見すると相矛盾し、相互に反発し合うように思われる諸要素が、「曖昧な制度」を媒介として有機的に結びつき、全体としてうまく機能しているところに中国経済の「独自性」があるというのが、加藤氏が提起する「曖昧な制度」の仮説である。

この「曖昧な制度」の概念化をめぐることは多くの議論がありうるし、中国経済研究を中国経済学に高めることを提唱し実践していた加藤氏の遺著ともなってしまった『中国経済学入門』でも、この「曖昧な制度」が、制度の「本質論」のレベルで、多くの研究者に共有されうるような一般的な概念化に成功しているかといえ、まだそこまでは達していないように思う。

しかしながら、この「曖昧な制度」の仮説の提起の意義は極めて大きいと考えるべきである。それは、かつて中兼氏が中国経済研究におけるこれからの課題として挙げた日本人研究者自身による「大胆な」発想と仮説の提示にほかならないし、これまでは先進諸国を対象として理論と実証が積み重ねてきた制度の経済学や資本主義の多様性論に新たな地平の分析を追加するものと言えるからである。実際、すでに開始されているが、加藤氏の「曖昧な制度」仮説の提起を契機として、現代中国経済の制度分析が一層深められていくこと(中兼和津次編『中国経済はどう変わったか：改革開放後の経済制度と政策を評価する』国際書院、2014年；加藤弘之・梶谷懐編著『二重の罫を超えて進む中国型資本主義：「曖昧な制度」の実証分析』ミネルヴァ書房、2016年)を通し

て、制度と制度変化の経済学においてこれまでとは異なる理論的・実証的な分析の地平が新たに拓かれる可能性があると言える。

・「中国型」資本主義のゆくえ

さて、加藤氏は「中国型」の特質、「中国モデル」と呼ばれるべきものを、中兼氏が指摘した「開発独裁モデル」と「漸進主義モデル」の2つに、「大国モデル」を追加したものとして捉えようとする。開発独裁モデルは、低所得国から離陸した新興国経済に特有のものであり、漸進主義モデルは、計画経済から市場経済への移行のあり方によって規定されたものである。こうした経済の改革・発展モデルの行き先には、「二重の罫」、すなわち「中所得国の罫」と「体制移行の罫」が待ち構えていることになる。これらに、中国では、大国であるがゆえの発展段階の異なる多様な地域から構成されているという特質が加わる。この「大国モデル」から、地方政府間での激しい成長競争という独特な仕組みが生まれるし、中央・地方上級政府が人事権を保持する一方、経済的な権限が地方政府に大幅に委譲されるという独特な中央－地方関係が形成される。こうした中央－地方関係のゆえに、地方政府の官僚が自由に経済を運営できる空間が現在の中国では大きく広がっている。ここにもまた「曖昧な制度」が媒介しうる大きな領域が存在することになる。

この「中国モデル」は今後、どこに向かうのか。

加藤氏は、中国モデルの本質を、〈開発独裁モデル＋漸進主義モデル＋大国モデル〉として捉えた上で、次のように述べる。

「今後も多様な資本主義が共存し、その1つの類型として中国型資本主義を捉えるならば、かなり長期にわたって、現行の経済システムを中国が維持する可能性は大きい」と。

だが、中国型資本主義のゆくえを、現時点で正確に予測するのは至難の業というほかない。それでも、今後も中国経済を含む東アジア経済、より広くアジア経済が「挑戦的な社会的実験室」(Boyer, Uemura and Isogai 2012)であり続けることは確実だろうし、その中でもとりわけ重要な位置を占める中国経済が、今後も極めて重要な分析対象であり続けることも同様に確実だろう。

その際には、「中国のシステムがわれわれとは異質のものとして理解の外に追いやるのではなく、そのシステムを構成するロジック、およびシステムと個人の関係について仔細に考察を加えれば、それはむしろ相互に理解可能なのだ、という所から出発すべき」(梶谷懐『「壁と卵」の現代中国論』人文書院、2011年)だし、「『進んだ』日本が『遅れた』中国を導くという、これまでの対中認識を抜本的に改める謙虚さと、中国の経済システムの強さと弱さを正しく理解する冷静さの2つが、われわれには求められている」(加藤 2013)。これらはまさしく至言である。

支部だより

東京支部

◆七夕総会報告

東京支部恒例の七夕総会が7月7日(金)学士会館210号室で開催されました。

今年の記念講演は、ANAホールディングス会長の伊東信一郎氏(昭和49年経済学部卒)から「最新・航空事情」と題して、世界の航空需要、LCC(Low Cost Carrier)の台頭とこれに対する日本の航空事情、およびこれからの航空とANAの取り組みを豊富な写真スライドをもとに約50分講演をいた



伊東信一郎氏 講演の様子

だきました。

その後開催された懇親会は、数年ぶりに100名を超える同窓生、特に平成年代、女性の多数の出席があり、博多山笠の正装で福岡支部平井副支部長、嶋田評議員の参加もあって、華やかに、かつ盛大に催すことができました。



懇親会の様子

その後の二次会は、初めて中華料理店「揚子江菜館」で開催しました。予想を超える出席者で、フロアに収まり切れないようになり、若手理事は立ち飲みとなるほどの盛況ぶりでした。

【事務局長 吉元 利行 1978(昭和53)年卒】



二次会の様子

.....

経済学部新卒歓迎会・九大東京同窓会 Summer Festaの報告



株式会社 東芝
西原 貴史氏
2014(平成26)年卒

皆様こんにちは。経済学部同窓会東京支部理事、ならびに九大同窓会の事務局担当者として、当方がこの同窓会支

部だよりも執筆できることを嬉しく思います。経済学部の新卒歓迎会と、全学部の九大東京同窓会サマーフェスタの運営を担当しましたので御報告致します。

2017年4月8日(土)に品川のしごとのプロ出版株式会社会議室にて経済学部新卒歓迎会が開催され、九大経済学部を卒業し上京した新社会人を中心



に合計27人参加頂きました。今回は、NHK元会長の初井勝人様、朝日新聞社元社長の箱島信一様、三井住友海上火災保険元会長の秦喜秋様という経済学部卒の大先輩方をお招きして、「私のターニングポイント」というテーマにてスピーチしていただきました。その後は、同じ会議室で懇親会、また近くの居酒屋で二次会を開催致しました。先生方には、新卒の学生へお声かけのご協力頂きまして、ありがとうございました。準備が年度末の繁忙期と重なり、運営側は大変でしたが、来年も同時期に開催予定です。

2017年8月26日(土)には九大東京同窓会Summer Festaが開催されました。閉館してしまった青山ダイヤモンドホールから東武銀座ホテルに場所を変え総勢362人に参加頂きました。今回はスーダンで医療を中心に活躍されております、NPO法人ロシナンテス代表の川原 尚行様(1992年医学部卒業)、並びに日本人としては初の国際宇宙ステーション長期滞在ミッションを達成されました若田光一様(1989年工学府修了)をお招きしスピーチしていただきました。テーブル毎対抗で九大に関わるクイズも開催し大盛況のうちに終えることができました。

以上二つのイベントを紹介しましたが九大ならびに経済学部の卒業生には各界で活躍されている先輩方が多数いらっしゃいます。新卒歓迎会では経済学部卒の方、サマーフェスタには九大卒業の方はどなたでも参加できます。是非同窓会活動にも目を向けて、次回はイベントへの参加の程よろしく願います。



関西支部

◆春の見学会（平成29年5月13日）

関西支部では、毎年5月に見学会を実施しています。昨年は、JR山崎駅の近くにある「アサヒビール大山崎山荘美術館」と「サントリー山崎蒸留所」でした。今年は、5月13日（土）に実施し、1400年以上の歴史を誇る日本最初の官寺・四天王寺界隈を巡りました。前日からの大雨が心配でしたが、集合時刻には雨もほとんど止み、午前10時に集合場所の大阪市営地下鉄「四天王寺前夕陽ヶ丘駅」前に集まり、四天王寺施薬院跡の愛染さんから、能「弱法師」に登場する石の鳥居、聖霊会舞楽大法要が行われる石舞台まで、総勢24名で散策しました。

今回はボランティアガイド2名の方に案内をお願いし、2班に分かれて散策しました。各箇所ではボランティアガイドから詳しい説明を聞きながらの見学会でした。

四天王寺が建立された6世紀末では、四天王寺が建つ上町台地は、かつては南北にのびる半島状もしくは細長い島状の土地であり、西側は大阪湾、東側は旧河内湖（内海）に面していたことがわかっています。



愛染神社

この旧上町半島の中心には難波宮が所在していました。この旧上町半島の付け根に位置するのが四天王寺であり、四天王寺が立地するのは旧上町半島の尾根状の微高地の南端であることがわかります。

こうした古代の地形を考慮すると、四天王寺を特徴づける、南大門・中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ伽藍配置は、その地形的な制約によることに加え、大阪湾の海上から眺めた時に伽藍が横一列に並ぶ景観上の演出効果を示していた可能性が高いと考えられるそうです。

今では全くの内陸の地であり、周りが海であった



四天王寺

とはとても想像できませんが、1400年以上前は海上から眺め、一列に並ぶ四天王寺の壮大さを感じている古代人がいたことを想像すると、古代のロマンを感じます。

散策の後はJR天王寺駅近くの「炉ばた焼 網兵衛」まで移動して、昼食懇親会を楽しみました。まず今回初めて参加していただいた徳賀芳弘先輩（昭和53年卒）と長野かおり先輩（平成元年卒）のご紹介の後、小森田支部長の挨拶と乾杯で昼食懇親会が始まりました。魚や貝、野菜の炉端焼きなど美味しい料理と沢山のお酒をいただき、大いに盛り上がりました。

皆さんが心地よくなったころ、今回参加された同窓生の中で最年長の清水逸雄先輩（昭和29年卒）に中締め挨拶をいただき懇親会を終了しました。

今年2月の支部総会で事務局長を仰せ付けられて初めての公式行事でしたが、皆様のご協力のお蔭で、楽しい一時を過ごすことができ、見学会も無事終了することができました。ありがとうございました。

【関西支部事務局長 谷村 信彦 1991(平成3)年卒】



懇親会の様子

なお、関西支部の今年の行事予定は
 9月9日（土）ゴルフ会 於：愛宕原ゴルフ倶楽部
 11月11日（土）勉強会 於：ハートンホテル北梅田

講師：遠藤 雄二氏（九大経済学部准教授）

演題：「失われた20年」から「希望の20年」へ

参加ご希望の方は遠慮なく事務局長までご連絡ください。

【お問い合わせ先】

公益財団法人 大阪観光局 谷村 信彦

T E L 06-6282-5908

E-mail tanimura-n@octb.jp

.....

大阪の観光レポート



公益財団法人 大阪観光局

谷村 信彦氏

1991(平成3)年卒

私は現在大阪観光局に勤めていますが、同窓会報の紙面をお借りして、関西とくに大阪の観光についてレポートしたいと思います。まず第1回目は「梅田スカイビル」です。

東京一極集中が進み、特に大阪の地盤沈下が言われて久しいですが、近年の関西空港を運航するLCC（Low Cost Carrier）の大幅増加等により、大阪は東京より訪日外国人客増加率が3年連続上回っています。

また、2019年のラグビーワールドカップ2019、2020年のオリンピックパラリンピック東京大会、2021年の関西ワールドマスターズゲーム2021など、さらなる訪日外国人旅客拡大が期待できるイベントが目白押しとなっています。

さらに、IR（統合型リゾート）誘致と2025日本万国博覧会誘致など大規模プロジェクトで、大阪が再び活気を取り戻そうと、国際観光市場の拡大に取り組んでいます。

そこで今回は、外国人旅客が多数訪れる、外国人観光客比率の高い「梅田スカイビル」を紹介します。

空中庭園を有する梅田スカイビルは、そのダイナミックかつ卓越したフォルムで世界的に知られる建築物で、2008年には英紙「THE TIMES」にてタージ・マハルやサグラダ・ファミリアと並び「世界を代表する20の建造物」として紹介されました。以降、



外国人観光客や海外の建築家にも認知され、訪れるべき大阪のランドマークとして注目されています。

地上40階・地下2階、高さ約173メートルの超高層ビルで、設計は原広司さんです。タワーイースト（東棟）、タワーウエスト（西棟）の2棟で構成され、その頂部を連結するように円形の空中庭園展望台を設置した構造が特徴です。これにより地震、風、振動への耐性が強化されています。この空中庭園は地上で組み立ててからワイヤーロープでつり上げる「リフトアップ工法」で施工され、また、イースト・ウエスト両棟を行き来するため22階に連絡通路が設けられています。

ビル最上部の空中庭園展望台からは梅田を中心とした大阪の都心と遠景を一望できます（有料）。超高層ビルの展望台としては珍しく屋上に設置され、360度の視界と風を感じながら眺められる展望台は観光スポットとして人気があります。

特に心に迫る夕日、ダイナミックな夜景には人気があり、日の入り前からは多くの外国人旅客が、大阪市営地下鉄・バスと35の大阪施設が無料で入場できる「大阪周遊パス（1日券：2500円、2日券：3300円）」を持って、入場ゲートに並んでいます。外国人がここでの体験をSNSで多数発信し、それを見た外国人が訪問するという好循環で訪問客数が拡大しています。

一度、外国人旅客がそこでどうやって楽しんでいるのか、外国人目線で大阪の観光地を楽しんでいたくのも面白いのではないかと思います。是非大阪に遊びに来てください。（写真は、下から見た梅田スカイビルの空中庭園展望台）

福岡支部

1. 来賓・同窓生等215名が参集し、盛大に開催 ～平成29年度福岡支部総会～

福岡支部では6月9日（金）、福岡市・ソラリア西鉄ホテルにおいて平成29年度総会を開催しました。総会では、前年度事業報告案・決算報告案、本年度事業計画案、役員選任案が審議され、いずれも原案通り承認されました。その後、森恍次郎監事（昭和45年卒）により、九州大学伊都キャンパスのプール温水化支援事業の紹介と募金のお願いがありました。また、経済学部在学学生から、カリフォルニア大学バークレー校の学生と英語で過ごすサマーキャンプの紹介と支援のお願いもありました。



久保総長による特別講演

続いて特別講演会に移り、九州大学の久保千春総長より、「九州大学の現状とこれから」について話していただきました。九州大学の近況、大学を取り巻く状況、九州大学アクションプラン2015-2020をわかりやすくご説明いただきました。平成30年度に移転完了を予定する九州大学の変貌ぶりがよく理解できました。講演の最後は、九州大学の最新の紹介映像を上映してもらいました。

懇親会は、今年の参加者数を65名上回る215名が参加し、盛況でした。貫正義同窓会長（福岡支部長、昭和43年卒）の開会挨拶に続いて、久保総長に来賓代表挨拶をいただきました。乾杯のご発声は、原田溥先生（昭和30年卒）に賜りました。その後しばらく歓談した後、来賓紹介に移り、村上裕章法学研究院長にご挨拶いただき、名誉教授の原田溥先生、逢坂充先生、福留久大先生、塩次喜



貫会長の開会挨拶



懇親会の様子

代明先生、磯谷明德研究院長をはじめ経済学研究院の現役の12名の先生方、経済学部同窓会東京支部の秦喜秋支部長（昭和43年卒）、関西支部の太田光一副支部長（昭和46年卒）、谷村信彦事務局長（平成3年卒）をご紹介しました。次に、今回初めての試みとして、嶋田正明氏（昭和54年卒）、道永幸典氏（昭和56年卒）、永竿哲哉氏（昭和61年卒）、白水清隆氏（昭和63年卒）に登壇いただき、ゴルフ交流会や忘年会など福岡支部行事の楽しい様子を率直に語ってもらいました。また、昭和40年代以前卒業の方々が登場して話す機会が少なくなったという声がありましたので、今回は皆さんに登壇していただき、原田準一氏（昭和26年卒）や右田喜章氏（昭和42年卒）に一言ご挨拶をいただきました。

閉会の時間も近づいてきた頃、九州大学文系新キャンパスのイメージの映像を上映しました。それに続き、九州大学応援歌・学生歌「松原に」の映像も流し、参加者全員で合唱しました。最後は新たに福岡支部副支部長に就任された村上英之氏（昭和58年卒）に博多手一本を入れてもらい、平成29年度総会は閉会となりました。



「松原に」を熱唱

今回の総会は西日本鉄道の同窓生の皆さんに幹事役をつとめていただきました。おかげさまで、平成29年度福岡支部総会・講演会・懇親会を盛況裡に終了することができました。この場を借りて、ご協力を深く感謝申し上げます。

【福岡支部副支部長兼事務局長 高木 直人

1982(昭和57)年卒】



伊都ゴルフ倶楽部クラブハウス前で集合写真

2. 福岡支部交流ゴルフ会 第62回コンペを開催！ ～5月14日（日）伊都ゴルフ倶楽部



西部ガス（株）
エネルギーソリューション本部
推進グループ マネジャー

末次 隆氏

1990(平成2)年卒

第62回コンペにて優勝させ
ていただきました平成2年卒

の末次です。優勝者の特権（？）として当日の様
をお伝えします。

今回の交流ゴルフ会コンペは、5月14日、快晴微
風、気温24度（昼食時）という何の言い訳もできな
いコンディションの中、前回はさらに上回る58名も
のOB様・OG様にご参加いただきました。

今回も幅広い年齢層の先輩・後輩にご参加いた
だき、メンバー表に記載されている卒業年が昭和なの
か平成なのか、初参加の方は戸惑われたのではない
でしょうか。ちなみに[26]が最年長（もちろん昭和）、
[21]が最年少（もちろん平成）。そろそろ[27]
や[28]といった数字で参加者をさらに混乱させて
くれる若手のエントリーに期待したいものです。

さて、伊都ゴルフ倶楽部で開催されている当ゴルフ
コンペなのですが、私には格調高すぎるコースの
せいか、とても相性が悪く、特にグリーンに毎回苦し
んでいます。この日も、3パット6回。また今日
もダメだったか、と落ち込みながらの表彰式でした
が、思いがけずハンディキャップに恵まれ優勝（グ
ロス93、ネット70.2）することができ、本当にビッ
クリしました。

優勝するときってこんなものなのでしょうか。後
になって振り返れば、程よくメリハリの利いたホール
バイホールだったように思います。OB出したホール
で3パット。ナイスショットがグリーンオーバー
して奥から寄らず3パット。バンカー脱出に苦勞し

たホールでも3パット。すべて隠しホールでした。
学生時代からの友人であり、福岡支部ゴルフ会メン
バー随一の「持ってる男」田川氏（59回、60回で連覇）
に次ぐ2連覇目指して次回も頑張りたいと思います。

毎回幹事を務めていただいている九州電力様には
改めて感謝申し上げます。また、素敵な賞品をご提
供いただいた貫会長、村上新副支部長、藤本新評議
委員、西日本シティ銀行様、三菱日立パワーシステ
ムズ様、仙台水族館開発様、海の中道海洋生態科学
館様、九州電力様、西部ガス興商様、ありがとうござ
いました。

次回開催は11月12日。とてもいい雰囲気のコ
ンペですので皆様ふるってご参加ください。

.....

3. 水族館経営にチャレンジ！



（株）海の中道海洋生態科学館
マリンワールドPFI（株）
代表取締役社長

岡村 卓也氏

1988(昭和63)年卒

私は、経済工学科（児玉ゼ
ミ）を卒業後、地元企業（西
鉄）に入社して30年目を迎えており、昨年6月より
福岡県唯一の水族館「マリンワールド海の中道」を
経営する子会社に社長として出向しています。日本
は、園館数が世界の2割に及ぶ水族館大国といわれ
ますが、公営か、民営であっても何らかの形で公的
資金が投入される園館が多く、マリンワールド海の
中道もご多分に漏れません。つまり、水族館は、単
なる営利を目的とした商業レジャー施設ではなく、
教育・文化の振興や自然保護の啓蒙、地域経済の活
性化など幅広く地域に貢献できる施設であり、いわ
ば「地域の財産」といえます。

水族館事業の経験はありませんでしたので、異動

内示を受けたときは少々戸惑いましたが、開業以来28年ぶりの全面的なリニューアル計画を完遂することが主な役割であり、地域の財産形成に貢献できることにやりがいと幸せを感じております。また、社長のほかに専門的知識と経験が豊富な館長が居り、水族館の具体的運営については館長が責任を持つ（これは欧州型的水族館統治であり、米国型は館長が経営責任者を兼ねるようです）ことになっておりますので、何とかかなりそうです。

そして、本同窓会報第62号でも紹介されましたが、昨年11月の第61回経済学部同窓会コンペを通じて、「仙台うみの杜水族館」の木村博社長（経済工学科・昭和58年卒）と知り合うことができました。奇しくも、三井物産に在籍されている木村先輩も同じような境遇にあり、昨年3月より、東北震災復興の一環として同社が投資を行い開業したばかりの仙台うみの杜水族館の社長をされております。水族館は、開業（或いは建替えや大規模リニューアル）の年に来場者のピークを迎え、その後は数年で飽きられ、コアなファン以外からは見向きもされなくなる傾向にあるため、慎重な投資と思い切った施設運営が必要となります。また、動物園と同様に水族館においても、外圧などにより展示生物の入手が困難になる方向に進んでおり、野生の鯨類（イルカやクジラ）の捕獲制限など水族館経営者にとって頭の痛い問題が多々あります。木村先輩との出会いは、館長任せでは解決できないような経営問題に対処するためにも極めて意義のあるものだと思います。

同窓会の宣伝のようですが、要するに、九大経済学部同窓会によって、東西の有力な水族館のトップ交流に繋がったこととなります。このことは、ミクロ的には、各々の経営者の意思決定のための貴重な情報源となり、また、マクロ的に見ると、各々の水族館事業を通じて、お互いの地域へと還元されていくこととなります。そして、私個人といたしましては、杜の都・仙台に出張する大義という大きな実利を得たわけでございます（笑）。木村先輩、その折には牛タンで一献、よろし



モンレーベイ水族館にて（筆者右）

くお願いします。

最後に、5月下旬、公益社団法人日本動物園水族館協会の年次総会に出席する機会を得ました。日本の動物園と水族館の黎明「東京都恩賜上野動物園」（通称：上野動物園）が、大正末期に宮内省から東京都に払い下げられた歴史的経緯からか、同協会の総裁は秋篠宮文仁親王殿下です。年次総会にもご臨席を賜ることとなっており、懇親会の場で直接言葉を交わすこともできました。折りしも、眞子様のご婚約内定が報道された直後で、多くのマスコミが会場に集まっておりました。我が愛娘は眞子様と同じ年ですので、祝福と殿下のお気持ちをお聴きしようと意気込んでおりましたが、宮内庁からのお達しがありできなかったことは残念でした。

しばらくは、なかなか経験できない、比較的ストレスも少ない、かつ、癒しの空間を持つ水族館勤務が続きそうですので、存分に働きたいと思っております。

.....

4. アサヒビール園でサロン会を開催

ファイナンシャルプランナー（CFP・1級FP技能士）
九州大学ビジネススクール15期生

藤吉 由貴氏

2001(平成13)年卒

照りつける夏の日差しがやっと落ち着いた8月18日（金）午後6時半、福岡支部恒例のアサヒビール園懇親会（サロン会）が開催されました。今回は名誉教授の福留先生、原田準一氏（昭和26年卒）、菊池武成氏（同38年卒）、柴田康之氏（同38年卒）、高木直人氏（同57年卒）、柴田祐二氏（同59年卒）、藤本浩司氏（同60年卒）、原口明久氏（同61年卒）、三浦剛氏（平成3年卒）、森永洋昭氏（同5年卒）、藤吉の計11名の参加でした。出来立てビールと各方面でご活躍されている大先輩方が焼いてくださるジン



筆者右から1人目

ギスカンを頂きながらの懇親会では、交流を深めるとともに、最先端の経済・経営のお話を伺うこともできました。私は2度目の参加でしたが、すでに来年の会を楽しみにしています。ぜひ次回のご参加をお待ち申し上げます。

5. お知らせ

(1) 交流ゴルフ会第62回コンペのご案内

福岡支部では、恒例の標記交流ゴルフ会を下記の通り開催します。ご友人等お誘いあわせのうえ、多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時 平成29年11月12日(日)

当日は7:30にスタート室前にご集合ください。

アウト及びイン第1組7:57同時スタート

場所 伊都ゴルフ倶楽部 糸島市香力474

TEL (092) 322-5031

(2) 忘年会のご案内

福岡支部では、忘年会を下記の通り開催します。万障お繰り合わせの上、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時 平成29年12月11日(月) 18:30～

場所 八仙閣本店

福岡市博多区博多駅東2丁目7-27

TEL (092) 411-8000

※メール、郵送、同窓会のホームページなどでご案内していますが、本会報をみて参加を希望される方は、下記事務局までご一報ください。

る方は、下記事務局までご一報ください。

〈上記お問い合わせ先〉

福岡支部事務局 高木、国生

公益財団法人九州経済調査協会 内

TEL (092) 721-4900

E-mail soumu-02@kerc.or.jp

(3) Facebookページ発足のお知らせと登録のお願い

このたび福岡支部では下記URLにFacebookページを発足いたしました。

<https://www.facebook.com/KUEAF/>

このページでは登録された皆様にサロン会、ゴルフ交流会、忘年会、総会等の各種イベントや、同窓生の近況報告など、様々なお知らせを掲載してまいります。

登録の仕方は、以下の2ステップです。

①福岡支部のFacebookページを開く

<https://www.facebook.com/KUEAF/> にアクセス、または添付のQRコード

②「いいね!」をクリック

PCではページ中段左側、スマートフォンでは左下にあります。

(上部写真の下にあります)

このページを読まれた方が【いいね!】を押したり【シェア】をしていただくことによって、より多くの同窓生につながっていくきっかけとなります。

このページを基点にして、新たな出会いや昔の仲間との再会があれば何よりです。

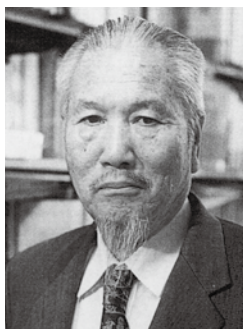
九州大学経済学部同窓会



福岡支部 Facebookページ

同窓生健筆模様

『旧軍用地転用史論』(上・下)と『ドナウを越えてバルカンへ』の刊行随感



立命館大学名誉教授

杉野 罔明氏

1958(昭和33)年卒

1963(昭和38)年博士入

九大大学院経済学研究科博士課程を退学して、50年に近い年月が流れました。そんな

歳月を経て、一昨年秋と今年の5月に『旧軍用地転用史論』(上・下、文理閣刊、上下併せて略々2千ページ)を刊行しました。この学術書の刊行をもって、九大時代にご指導をいただいた故高木幸二郎教授、故吉村正晴教授、故正田誠一教授、それから今もご健在な木下悦二教授などの諸先生の学恩に、少しでも報いえたのではないかと思います。

では、この書物を執筆した経緯とその内容について若干の紹介をいたしましょう。

昨今は、国有地の売買に関する話題が賑やかですが、旧軍用地もまた国有地です。日本は第二次大戦の敗北と同時に、国内外において膨大な軍用地を残すことになりました。国外は別として、戦後における旧軍用地は約10億坪、そのうち大蔵省に移管されたのは約8億坪でした。この膨大な旧軍用地の多くは、農地改革(主として自作農創設)や学制改革(新制大学や新制中学の創設)に伴う用地として、後に



は自衛隊創設用地として転用されました。だが、私の関心は、工業用地への転用実態を把握することでした。

そうした問題意識が生じたのは、私が九大産業労働研究所の助手をしていたときに抱いた「戦後日本の地域開発」、とりわけ工業立地の研究との関連でした。当時（昭和40年）は、旧軍用地の工業用地への転用実態は、一部が明らかにされただけで、その全体像（所在地・数量）は全くの不明でした。また、研究書でも、その払下価格に対する評価は、「極安」「ただ同様」といった観念的な表現に留まっておりました。

昭和47・48年度には、昭和財政史室（大蔵省）が、故安藤良雄氏（東大教授）の主導のもとに、各財務局の協力を得て、「旧軍用財産資料」を作成しました。だが、この「資料」は書物としては刊行されることはありませんでした（現在は所在不明）。

本書は、この「資料」を基礎として、旧軍用地の全体像およびその転用状況を、工業用地への転用を中心にまとめたものです。そこでは、旧軍用地（国有地）の転売に関する法律的諸問題をはじめ、賠償問題、旧軍港市転換法、復興基金公団などについても触れています。また、この「資料」に含まれていない沖縄については、本土復帰した1972年以降における旧日本軍の所有地の状況について調べました。沖縄で「軍用地」といえば、米軍が支配している軍事施設用地のことです。その軍用地の状況と県民の軍用地（特に旧日本軍用地）返還運動との関連についても調査しました。その結果、私が調査した旧軍用地の所在地は、北は稚内、南は西表島に及びます。

なお上記の調査にあたっては、平野豊（三井銀行）、古賀宏美（新日鉄）、隈正之輔（テレビ西日本）、梅田和義（神戸製鋼）、志田和也（会計検査院）な

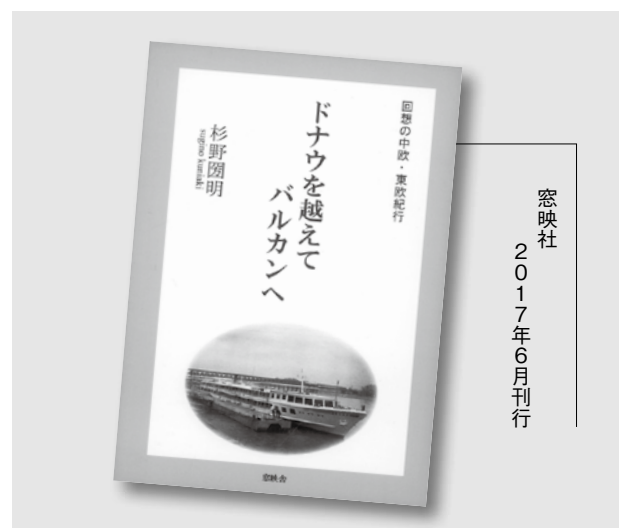
どの高木幸二郎ゼミの同輩、恩塚典克（三菱重工）、故広津正一（小野田セメント）、故高野博臣（凸版印刷）、故長友泰明（九経連）などの同級生、岩野茂道（熊本学園大）、藤田暁男（金沢大）仲村政文（鹿大）などの大学院の先輩、学部後輩の柿本信夫（九経調）、藤沢憲治（九経調）、加峯隆義（現・九経調）、長尾佑策（帝人）など、数えれば限りないほど九大経済学部（大学院を含む）卒業生のご協力を戴きました。この場を借りて、心より感謝の意を表します。（括弧内は当時の勤務先・敬称略）。

さて、本書の上巻では、旧軍用地の概況をはじめ、旧軍用地の工業用地への転用を、地域別、産業別、資本系列別など数量的に明らかにし、かつ工業用地への払下価格について分析しました。また、下巻では、旧軍用地の転用をめぐる諸問題、すなわち国際関係も含めた諸資本間の競争、地方自治体との関連などについて、市町村別に分析しています。その詳しい内容については、本書を直接ご覧下さい。

旧軍用地と九大との関連で言えば、昭和24年に軍馬補充部十勝支部遊牧地（3千万㎡弱）が文部省に移管され、それを九大は管理・活用しております。私が入学した当時、「九大には北海道に演習林がある」ということを大いに誇りに思ったものです。

これは戦前に、九大が海外（満州、朝鮮、台湾）にもっていた演習林を失った代替地として利用するようになったものです。その他には、指宿海軍航空隊の跡地（約1万5千㎡、昭和27年）を九大は管理しています。

ちなみに、九大が管理している旧軍用地は、京大（2千3百万㎡）、東北大（1千9百万㎡）、岡山大（5百万㎡）、鳥取大（4百㎡弱）などと比しても判るように、公立・私立大学を含めて、日本の大学の中では、最大規模に達しています。



いささか余談に流れました。余談のついでに、旅行記についても触れておきましょう。今年の5月には、『ドナウを越えてバルカンへ』（回想の中欧・東欧紀行、窓映舎）を刊行しました。九大第二分校から大学院（高木幸二郎ゼミ）までを通じて私の先輩だった逢坂充九大名誉教授は、この書物について次のように評しています。

「歴史の古い欧州の地域だけに内容も豊富で面白く、また道中の物語的展開や冷戦時代の滑稽な話など見事に描きだされていて、紀行文としての歴史的な価値がある」「後世に残る紀行文の名著だ」。

逢坂さんの褒め上手は別として、ソ連、東独などの紀行文にはなかった、旅する人の「開放感」が、1981年当時においても、この書物に見られるからではないでしょうか。

私はこれまでに、シベリア・中央アジア、シルクロード、ヨーロッパ、サハラ、メキシコ、マチュピチュなど、16冊の世界旅行記を刊行してきました。文章や内容はともかくとして、個人による世界旅行記の刊行冊数としては、ギネスものだと自負しております。それでも半寿になると、体調不全もあり、一人で自由に世界を駆けめぐるといふわけにはいきません。先月（2017年7月）、中国山東省を旅し、青島でビールを飲み、蓬萊で徐福に思いを馳せ、泰山で天封、岱廟で地禪。それから三孔（孔府、孔廟、孔林）などを巡ってきました。しかし、それらを文章化することはもう億劫です。なぜかと言えば、『蒼天の彼方』（内蒙、オールドス、青海）、『中国古都漫遊』



（西安、開封、洛陽など）『私のパタゴニア』（チリ）という原稿が印刷されず、手元に陀しく残っているからです。

不思議なことに、私を悩ませていた腰痛が、この一人旅で治りました。このことだけは付記しておきましょう。この老骨に、まだ、まだ頑張れという天意でしょうか。

（2017年8月5日）

〈著者略歴〉

昭和40年大学院博士課程単位取得退学後、九大産労研助手をへて立命館大学へ。立命館大学経済学部長・理事、日本地域経済学会会長、京都府工業立地対策委員などを歴任。



青島空港にて 2017年7月17日

『京都企業 —歴史と空間の産物—』



京都大学副学長
経営管理研究部教授

徳賀 芳弘氏

1978(昭和53)年卒
1983(昭和58)年博士単位取得

京都に本社を置き、「京都企業」としてひと纏めにされて高い評価を受けている企業群がある。「京都企業とは何か」については、論者によって若干の相違はあるものの、京セラ、村田、日本電産、オムロン、任天堂、GSユアサ、ローム、島津、SCREEN、宝（ここまで、京都企業の売上高上位10社、以後この10社を考察の対象とする）、ワ

コール、堀場などが「京都企業」と考えられている。

これらの企業は、「京都企業特集」という形で新聞や経済ジャーナル等で頻繁に取り上げられ、膨大な数の書物も刊行されている。しかし、刊行されている書物には、「サクセスストーリー型の説明」に陥っているものも多い。例えば、京都企業の現在の成功という事実から逆算して、過去にあったはずの成功要因を探し当てようとするため、過去のあらゆる出来事が京都企業を成功に導いたかのような「後知恵バイアス」をかけてしまったり、成功を説明するのに都合のよい事実だけを拾い集めてしまったり、逆に過去の特徴的な出来事から容易に説明できるもののみを京都企業の特徴と定義したりしている。

「サクセスストーリー型説明」の呪縛を免れるために、京都企業の成功ではなく、もう少しニュートラルな非説明変数を設定して因果推論を行った方が

よさそうである。そこで、多数の点でユニークな京都企業の特徴がどのようにして形成されたのかという因果推論に変更したい。紙幅の関係でエビデンスを示す余裕はないが、京都企業の経営戦略（その結果としての財務データを含む）について、京都企業の多くには共通するが、大阪、愛知、及び兵庫の企業の多くにはないものを、京都企業の特徴として取り上げてみよう（以下の①②③④については、先行研究でも言及されている）。

- ①産業選択：なぜ、電子部品等と電気機械機器に集中しているのか。
- ②バリューチェーンにおける位置（川上・川中・川下）：なぜ、完成品（またはトヨタのようなフルライン）ではなく、パーツ中心なのか。
- ③販売戦略（市場選択）：なぜ、設立当初からグローバルな展開を行い、グローバル市場シェアに固執しているのか。
- ④競争戦略Ⅰ：なぜ、競争回避の戦略、特にブルーオーシャン戦略を多用するのか。
- ⑤競争戦略Ⅱ：なぜ、粗利益率が高いのか（いかにして、コストリーダーシップ戦略と差別化戦略との両立を実現させているのか）。
- ⑥財務戦略の特徴：なぜ、これほど財務安全性を重視しているのか。
- ⑦ 経営管理の特徴：なぜ、フラットでユニークな経営管理組織を考案したのか。

これらの特徴は、それぞれがWhy疑問に転換され、「京都企業は京都の伝統工芸社会の価値観を継承している」（ここで、「伝統工芸社会」とは、その起源が奈良・平安・室町時代であっても、明治期以降、輸出のための増産という必要に応じて変化し、現代まで続いているものを意味している）という作業仮説の構築へと繋がることになる。因果推論の方法は「アブダクション」（C. S. Pierce）である。

- a 京都企業は、経営学の常識とは大きく異なる経営戦略等を採用している。
- b ある作業仮説（京都企業は、京都の伝統工芸の価値観を継承している）が正しいとすれば京都企業がそうであることは容易に説明がつく。
- c したがって、その作業仮説が真であると考えべき理由がある。

上記の①～⑦の特徴が生み出された要因は何か。京都にはあって他の地域にはない地勢学的な特徴や京都企業にのみ強く影響する歴史上の経済的出来事から、これらの特徴を説明できるのであれば、伝統工芸社会の価値観といった怪しい要因を持ち出す必



要はない。

紙幅の関係から大雑把なことしか言えないが、まず、京都の地勢学的な条件を見てみたい。京都には、もともと平地が少ない上に、神社仏閣が散在しており、重化学工業に必要な広い土地の確保が困難である。また、原材料や製品を輸送するための良港もない。さらに、巨大な機械や装置を準備するための財閥等の資本の集積もない。つまり、地勢学的な条件から、京都で重化学工業の立地は困難であることが分かる。そのため、京都の工業が、高付加価値の電子部品・電気機械等の先端産業に特化したことは「引き算」として説明可能であろう。→①

次に、京都の歴史的な条件をみてみよう。これも紙幅の関係から1点のみ触れておきたい。明治政府は、遷都による荒廃を避けるために、西洋の最新技術・知識を導入することによる京都の復興を計画し、清水焼の工業化に貢献した「京都舎密局」（工業試験場）を設立したり、輸出用の西陣織の工業化を進めるために、複数の技師をフランスに留学させたりした。また、京都の工芸品の輸出を増やすために、欧米で開催された万博への出品を行った。つまり、明治期以降、京都は当時の先端技術におけるイノベーションへの意識が高く、また海外志向の強い場所であったという。→③

しかし、京都の地勢学的・歴史的な条件を精査してみても、京都企業の特徴のほんの一部しか説明できないことが分かる。そこで、前述の作業仮説を細分しながら、因果推論を行ってみたい。京都の伝統工芸では、需要が増加し増産の必要が生じてくると、作業の超細分化や専門化によって対応した。細分化されたパートのいずれも一流の専門家が存在し、そのパートを担うことに誇りを持っていたという（財部

誠一 [2015])。部品の製造に誇りを持って取り組んでいる京都企業の価値観に通ずるものがある。→②

実は、上記の③④⑤は、いずれも「競争回避」に関わっている。京都の伝統工芸社会における「棲み分ける」「他人の領分を侵さない」といった価値観は、競争を避けるために、ニッチ市場での独占を目指し(→③)、また、ブルーオーシャンを探すという現在の京都企業に通ずるものがある(→④)。さらに、粗利益率が高いのは、ユニークで優れた部品を大量生産することによって、コストリーダーシップ戦略と差別化戦略の両立は難しいという理論(M.ポーター)を克服できているからなのである(→⑤)。

伝統工芸社会では、長寿であることが大事にされてきた。日本には、1,000年以上続く会社が10社あるようだが、そのうちの半分は京都にある。また、京都府は、1968年以降、100年以上続く老舗を表彰する制度を設けており、2017年5月までに1,906社が表彰されている。企業の無理な成長よりも存続を選ぶとすれば、京都企業の超保守的な財務戦略の説明は可能である(→⑥)。もちろん、企業の長期的存続のためには、継続的なイノベーションが必要であるのはいうまでもないが……。

伝統工芸社会は、職人間で差別のないフラットな社会を構成していたようである。しかし、そうだとすれば、原材料の収集から完成品の販売まで別々の職人が担当しているため、トータルの原価管理が困難となり、市場の求める価格で製品を提供できなくなる。明治維新以降、需要が激減する中で京焼の店も次々に倒産したという。このようなフラットな組織を維持しながら、トータル管理を可能にするものとして、言い換えれば、伝統工芸社会の価値観を維持しながらその欠陥を克服するシステムとして、アメーバ経営が考案されたとも考えられる(→⑦)。マトリクス組織の採用も、フラットな組織に経営管理を導入したものと理解できる(→⑦)。

以上の「伝統工芸社会における価値観」＝「京都企業の特徴」は、いずれも机上で考えられたものに過ぎない(エビデンス)という批判が可能であろう。実は、伝統工芸と京都企業には、多くの直接的な人的関係が存在し、技術的な伝承のみならず、価値観の伝承も充分にあり得たということを述べておきたい。例えば、村田の創業者である村田昭氏は、第二次大戦中に五条坂で清水焼の店を開いていた時に、政府から高性能レーダーに用いるセラミックコンデンサーの制作を依頼され、戦後に成功している。京セラの稲盛和夫氏は、大卒後、清水焼の工業化(耐

酸性・耐高圧性)に成功した松風工業で働いていた。島津の創業者、島津源蔵氏は親の仏具店を引き継いでおり、島津や堀場の精密機械の表面処理技術は、仏壇の金メッキ技術の応用と言われている。さらに、SCREENの創業者、石田才次郎氏は、京版の店に生まれており、写真画像の印刷技術に、版画の技法が応用されているという。

前述のアブダクションによる因果推論に従えば、「京都企業が京都の伝統工芸社会の価値観を継承している」という作業仮説が真と考えるべき理由がある、とは言えそうである。膨大な数の潜在的な説明変数を対象とした因果推論では、結論も仮説にとどまらざるを得ないが…楽しい作業である。

(後記)

福留久大先生より京都企業について何か書いてほしいとの依頼がありました。おそらく、拙編著『京都企業－歴史と空間の産物－』をどこかで目にされたことなのでしょう。福留先生の経済学の講義を履修させていただいたこともあり、また九州大学の卒業生でありながら日頃九州大学に何も貢献していない、という後ろめたい気持ちを持っていることもあり、お引き受けすることにしました。

前著『京都企業の分析』は、当時のわたくしのゼミ3・4回生と一緒に作ったものでした。追分析が可能のように、企業の開示しているデータのみを使って分析しました。有り難いことに、対象企業の財務担当者からコメントを頂くこともできました。その後、前著の財務データ等が古くなりましたし、前著に対して頂いたコメントにもお応えするため、『京都企業－歴史と空間の産物』を新たに編集しました。前著の執筆者たちがすでに卒業しているため、研究室出身の研究者たちと一緒に纏めました。本寄稿にあたり、本書の内容を紹介するというよりは、本書で展開できなかった、「京都企業は京都の伝統工芸社会の価値観を継承している」という「作業仮説」について書かせて頂きました。

〈著者略歴〉

1983年～1987年、熊本商科大学専任講師。1987年～2002年、九州大学助教授～教授。2002年～京都大学教授。2005年～経営管理研究部教授併任。2013及び2014年度、経営管理研究部長・教育部部長(経営管理大学院院長)。2015年～副学長(大学基金と同窓会担当、経済学研究科・経営管理研究部教授との併任)。企業会計基準委員会、企業会計審議会、及び公認会計士監査審査会の各委員、日本学術会議会員などを兼務。

リレー随想

九大の思い出



町野 五彦氏

1957(昭和32)年卒

はじめに

私は昭和32年に経済学部を卒業しました。今般同窓会報に投稿依頼を受けて大変迷いました。毎回楽しみにしている会報ですが、私のような平凡な学生生活を送った人間が書くような場所ではないと思いましたから。しかし他面このような学生がいた事を知ってもらうことも意味があるのではないかとも思い寄稿することにしました。

満洲大連からの引き上げ

終戦を迎えたのは、大連で小学校6年の時、引き揚げは昭和22年2月でその時は大連一中生でした。2年上には寅さんシリーズで有名な山田洋次監督がおられました。中学生と言っても3か月ほどで閉校になりましたから、1年間何も勉強はしていません。それでも1学年終了証書をいただきました。大分県日田市に引き揚げ、新制中学の2年生に転入学しました。入学して驚いたのは生徒の8割は農家の子供でしたから、休暇の多いことです。春休み、夏休み、冬休みのほかに田植え休み、稲刈り休み、麦刈り休みがあり、勉強する雰囲気ではなく先生も野良着のままで教壇に立つこともありまして、誠に和やかなものでした。

その後日田高校に進学しましたが、当時の我が家の家族は、兄、私、甥、姪と両親の6人家族で、父親が引き揚げ時61歳と高齢で仕事がなく、父親の年金と母親のニコヨン労働で生活していたため、生活が苦しく大学に進学することなど考えられませんでした。しかし東京にいた兄の説得等で進学することになり、九大を受験しましたが勉強不足で1年浪人し翌年何とか合格することができました。

久留米分校への通学

当時久留米市にあった久留米工専が九大に併合され、そこが九大の第2分校となり教養課程が設置されていました。私は九大線で1時間かけて日田から久留米まで通学しました。当時の思い出は、日田は

下駄の産地で靴は高く買えないので、下駄履きで通学しました。ドイツ語の教師より廊下を歩くとうるさいので下駄はやめろと注意されましたが、靴を買える状況になく無視しましたが、その態度が悪かったのか、絶対自信のあったドイツ語の試験が不合格となり再試験でやっと単位をもらいました。授業は全く新鮮味がなく高校の授業を繰り返した感じでした。分校は筑後川のそばにありましたので、川を渡らなくてはなりません、当時橋が無く、渡し舟を利用して渡っていました。この川には日本住血吸虫が生息しているとのことで、川にはまらないように気を使いました。

学部への進学

教養課程は2年でしたが、1年半に短縮されて箱崎の経済学部に進学することになりました。日田から通学することは無理でしたが、幸い子供の家庭教師を兼ねて置いてくれる家庭がありましたので、そこにお世話になりました。しかしこの家は那珂川の川沿いであって、夜には窓の外に娼婦が立ってお客を呼び込みしていて、子供と一緒に勉強していると、「いくら」等と言う商売言葉が聞こえ、気を取られるのに困りました。ここには学生寄宿舎に入寮するまでお世話になりました。

学部の講義

講義は単調で先生が読み上げる内容をひたすらノートに筆記するだけの講義が多く、暫くすると印刷されたガリ版刷りが売ってしまいましたので、講義にはあまり出席しなくなりました。それと入学して初めて気付いたのは、当時の九大経済学部はマルクス経済学が主流で近代経済学の講義はあまりないことでした。当時向坂逸郎教授などの日本を代表するマルクス経済学者が講義されていました。先生が「自分が正しいと思うことを信じて生きることは幸せだ」との意味のことを発言されてのを思い出します。大学は上から教えて貰うのではなく、自分で学ぶと



プールサイドにあった学生寄宿舎にて 昭和31年 4年生の時

ころだと聞いていましたが、生活に追われていたとは言え全く自主性がなく単位を取って卒業することだけしか頭になく、近代経済学研究会などというサークル活動の募集広告なども横目に見て通り過ぎるだけでした。唯一友人のI君とアダムスミスの国富論を原書講読した事が思い出として残っています。親類の一橋大学生と話す機会があり自分が全く近代経済学について知識がないのに愕然とした思いがあります。

学生寄宿舎の生活

当時学部の寮はこしかなく、ここに入寮できたのは幸いでした。希望者が多く選考基準は経済状況の厳しい学生が選ばれたと推測しました。環境は松林に囲まれ隣にはプールがあり素晴らしい寮でした。入寮者は全学部にまたがっていました。医学部のしかも産婦人科専攻のAさんは、みんなから羨ましがられていましたが、「毎日見ていれば、何のことは無いです」と言っていました。夜には時には誰もいないプールで裸で泳いだこともありました。寮内はいつも静かで姉が訪ねてきて、「みんな勉強ばかりしているの?」と言っていました。経済的に貧しい学生が多いので、部屋では勉強するか、寝る以外はすることはなかったです。唯一卓球台が置かれていたので、金の掛からない遊びで大いに利用されていました。

思い出

ここでの一番の思い出は、前日たまたま日田に帰郷して悪友たちとどぶろくを飲んでいたため寮に帰ってから腹痛を起こし、事務室に相談した結果、学長の車で九大病院まで送ってもらうことになりました。たまたま来ていた友人のI君と同室の滝口君の両名に肩を抱えてもらいながら、病院に行きました。診断の結果は盲腸炎で手術をして1週間で退院しました。当時の九大の学生は、入院費は無料でした



久住高原にて
九大付属看護学生と

たから助かりましたが、部分麻酔でしたのでインターン生に教授が指導しながらメスを使っていることが良くわかりました。その後入院中に知り合った看護学生たちとピクニックに行ったりしたのが、楽しい思い出となっています。

現在83歳で残り少ない人生の最後にこのような寄稿の機会を与えて頂き感謝いたします。

リレー随想

私の人生の原点は大学時代



株式会社堀甲製作所 営業部長

野瀬 義人氏

1975(昭和50)年卒

私は1年半前に奇跡的に大腸癌から復帰しました。私の大学

時代から今までの46年間を振り返ってみます。

(1) 大学在学中の思い出

① L1-11時代(大学1、2年生)

L1-11のメンバーは強烈な個性を持った人達ばかりでした。入学してまもなく、西嶋君とクラス委員となり、また、合ハイ委員も兼務していました。その頃は沖縄返還闘争、反米闘争に巻き込まれ、川口武彦先生(クラス担当)との対話、クラスメンバー全員との協議が毎日続きました。私も連日、西嶋君と徹夜で討論した事を覚えています。とにかくクラスの仲間は皆仲が良く、合ハイは皆参加していました。当時、討論会の原稿作りに女性の中園さんに手伝ってもらった事を覚えています。独語の先生の講義をボイコットし、クラス全員で沖縄返還について討議したこともありました。また学生デモや機動隊とのみ合いも経験しました。

ソフトボール大会では、L1-12と引き分け再試合(日没)となり、負けましたが、皆泥んこになったものです。私はキャッチャー、林君がピッチャーでした。1年生の終盤になると清掃のアルバイトで私が率先し西嶋君、平川君、南部君他クラスの数人を斡旋していました。某ボーリング場の清掃中、仲間が勝手にレストランのケーキを食べ、清掃会社の社長に大変叱られた事も良く覚えています。

亭々舎での忘年会では、クラス30名程が集まり、どんちゃん騒ぎでした。中家君の黒田節に始まり、中村健治君、早田君、富井君らが盛り立て役になり、



昭和46年 教養部ソフトボール大会

最後の写真撮影は中楯君でした。

②九大フォークソング同好会を創立

沖縄返還闘争に疲れていた私はアルバイトで知り合ったL1-12の前田君、藤田君、吉田君と天神にあるフォーク喫茶「昭和」に昭和46年末頃殆ど毎日のように通っていました。その頃は海援隊、チューリップ、りりィ、甲斐よしひろが出演していました。最も衝撃を受けたのが、チューリップの財津和夫さんの歌でした。ビートルズの名曲yesterdayをソロで弾き語りしていました。その時、私は大学にない斬新な音楽同好会を創ろうと決意しました。これが、46周年を迎えた「QFolk」の始まりです。後で解った事ですが、まさか私の母と財津さんの父が韓国で近所付き合いしていたとは思いませんでした（NHKファミリーヒストリー）。

ギターを弾けない私は毎日8時間以上練習し、独学しました。そして同年12月に同好会を発足し、九大教養部正門前で入会用パンフを配布し、70名程入会しましたが、あいにく部室がなく解散状態でした。これから私の大変な苦勞が始まります。1. 部室の確保（自治会との交渉により）。2. 楽器の購入（アルバイト代で調達）。3. 会員の確保（入会オリエンテーション開催）。4. 演奏会の実施（大学文化祭）。5. キャンプ（芥屋海水浴場、九重合宿）。6. ラ



2016年9月18日 九大フォークソング同好会
結成45周年（東京・渋谷）真ん中で歌っているのが筆者

ジオ局への出演（KBC、RKB他）。これを全部私が企画、実行して約2年間努力したのが、現在のフォークソング同好会の原点になっています。50周年に向け全国各地でOB達が定期的な演奏会を実施しています。私の誕生日にはL1-11の中野君、中原君を自宅に招待し、ギターを演奏した事を覚えています。

③ゼミの思い出

大学3年生にもなると将来の人生の在り方を考えていました。当時はマルクス経済学が主流でしたが、昔から貿易に興味を持っていたので、国民所得論を講義されていた武野秀樹先生のゼミを受講しました。（L1-11花村君も受講）。マクロ経済学、ケインズ経済学、国民所得計算論を学びました。卒業論文題材は国際経済均衡について、マクロ経済学の一部を応用しました。これが私が商社を選択したきっかけになりました。九重にある九大合宿所に宿泊し、ゼミの合宿後、牧ノ戸峠から九重山頂上まで駆け足で登山した事を覚えています。

（2）会社時代の思い出

私は商社希望だったので、大手商社全て受けました。そして三井物産の入社試験にパスしました。当時の先輩から自由闊達な会社だと聞いていましたが、その通りでした。新入社員時代の東京での生活は大変でしたが、会社生活にも慣れ、物産マンとしての自覚を持ちました。毎日が勉強でした。物産時代の一番の思い出は、経理部から化学品営業に転出した地方支店での約7年間長期プロジェクト勤務です。現在、NHKの大河ドラマのヒロイン・井伊直虎の生誕地浜松での勤務、スズキ自動車との小型車オール樹脂化開発プロジェクトは私の会社人生にとって、貴重な経験となりました。東レ、三井東圧、帝人化成、協和化学他が参加し、日本初の一人乗り（免許不要）車の開発でしたが、国土交通省の規制により、中止となりました。L1-12の東レ松田君、森君にはお世話になりました。浜松は日本の中心地、徳川家康の出世城でもあります。浜松のやらまいか精神はスズキ・ホンダ・ヤマハを生み、またトヨタ自動車発祥の地でもあります。織機メーカーから発展した会社でもあります。私はここで、メーカーとしての在り方について勉強しました。その後物産の関係会社に出向、母が重病となり、帰福し、その後機械商社に勤務しました。現在、熊本に本社があるヤマハ発動機の下請け会社の営業活動をしています（物産時代の営業経験を活かして）。

（3）末期癌大腸癌との闘い

母が平成23年に亡くなった4年後、平成27年3月

福岡徳洲会病院に救急車で運ばれ、末期の大腸癌、余命6-12ヶ月と診断された時は頭が真っ白になりました。これで自分の人生は終わったと思いました。L1-11の中原君、平川君も病院に駆けつけ励ましてくれました。また中野君、西嶋君、浜中君、松田君からも励ましの電話がありました。藤田君も何回も見舞いに来てくれました。これが仲間だと感謝しています。2回の大手術の後、癌との闘いが続きましたが、奇跡的に癌が消滅したのです。消滅した原因は1. 化学療法、2. 漢方薬、そして3番目は私が最後に皆さんに伝えたいある書物の言葉です。

(4) 私の闘病を支えた言葉

「人生に意味などない、無意味である」

サマセット・モームが著作した『人間の絆』の中のある言葉です。闘病中何度も熟読しました。長い文章ですがいくつかを引用してみます。

「いったい人生とは何の為にあるのか?」「織匠(おりこ)がああのパルシャ絨毯の精巧な模様を織り出して行く目的がただその審美感を満足させようというだけにあるとすれば、人間もまた一生をそれと同じように生きていけばいい訳だし、またその人の行動一切がその人自身の選択以外のものであるとしか考えられないとすれば、やはり同じようにその人生をもって単に一片の模様意匠と観ずることもできるはずだ。何もある行為をそうしなければならない必要もないかわりに、したからと言って別に益もない。ただ自分の喜びの為になにかをしたというに過ぎない。そして何か人間に選択力があるが如く思うのは結局単なる幻覚、つまり現象と空想とが巧みに合わされた手品に過ぎないかもしれないが、それもまたそれで良いのではないか。」「人生無意味、したがって何ひとつとして、言うに値するものはないという考えを背景にして、さてこの人生という広大な経糸(たていと)を考える時、それはどこも知れぬ泉から溢れだし、いずれとも知れぬ海へと絶え間なく注ぐ大河だ。人はどのような撚糸(よりいと)を選び出して、どのような模様を織り出すとしても、彼としては満足なわけだ。」「人生は人各々違うし、それはそれで良いのではないか。人は結果を追い続けるのではなく、あるがままの人生を生きていけば良いのではないか。それは他人が見てどう思うとか気にする必要もないのだから。」

私はこの本を高校時代に読み、大病中に再度読み返した時、何か束縛されたものから開放された気がしました。これが闘病を支えた言葉でした。これからはあるがままに生きようと思います。大学時代の

友人に出会えて本当に良かったと思います。今後も健人会の皆さん(中原君、中野君、中村博文君、箱崎君、中尾君、中山君、中家君、西嶋君他)大学時代の友人と交流して行きたいと思います。

飲んで 笑って 歌え これが今の心境です。



2017年7月24日 ミニ同窓会(雑餉隈 一品香)
左から筆者、中尾君、中原君、平川君、中山君

リレー随想

ファントム墜落から来年50周年



元福岡市役所勤務

坂井 智明氏

1976(昭和51)年卒

1968年6月2日(日)の夜、米軍機ファントムが箱崎キャンパスに墜落。来年の2018年で50周年となるが、その前年になる去る5月31日に旧工学部本館にて「ファントム墜落50年・さよなら箱崎キャンパス」記念集会・プレシンポジウムが開催された(参加者約50名)。墜落当時、中学3年生であった私であるが、縁あってこの集会の呼びかけ人の一員になったので、これまでの集会の概要と来年に向けての取組を紹介させていただく。

・30周年シンポジウム…1998年6月6日

箱崎キャンパス国際ホールで開催され約80名参加。コーディネーターは平井孝治氏(68年当時九大工学大学院生、98年当時立命館大学教授)で、パネリストは桂木健次氏(68年当時九大経済学大学院生、98年当時富山大学経済学部教授)、松本文六氏、荒牧軍治氏(68年当時九大工学大学院生、98年当時佐賀大学理工学部教授)であった。

・40周年プレシンポジウム…2007年6月2日

箱崎キャンパス文系中講義室で開催され「エンブ

ラを原点とする私にとっての『「闇の奥」の奥』と題して藤永茂氏（68年佐世保エンブラ闘争時九大教養部教授、07年当時カナダ・アルバータ大学名誉教授）が講演。「闇の奥」とはアフリカ原住民に対する苛烈な搾取を取り上げた英国作家コンラッドの小説であり、藤永氏は翻訳本を上梓されるとともに自ら『「闇の奥」の奥』（副題は「コンラッド・植民地主義・アフリカの重荷」）を発刊されている。次に九大演劇戦線の和田耕治氏への追悼企画として演劇戦線制作の「ソステヌート68～72」が和田氏の成長された子息子女の手によって上映された。経済学部など文系の学生にとってはサークルボックスの一角にあった演劇戦線の記憶は強く残っている。続いて「ファントム墜落からみつめ続けた『いのち』』と題して松本文六氏が報告。松本氏は69年5月から70年1月までの8か月に及ぶストを実行した九大医学部学生自治会の委員長であり、現在は大阪市で社会医療法人の理事長として地域医療に従事。報告時の翌月の7月には参議院選挙の大分県選挙区に無所属（社民党推薦）で出馬。民主党と社民党が交代で統一候補を出す大分方式を民主党が破ったため松本氏14万票、民主党推薦候補17万票で計31万票獲得するも共倒れとなり、19万9千票の自民党候補に惜敗する残念な結果となった。シンポの最後に今後の取組みの討議の素材として桂木健次氏（07年当時福岡工業大学社会環境学部教授）と森山沾一氏（68年当時九大教育学部学生、07年当時福岡県立大人間社会学部教授）の両氏から『「九大学生運動史断章」の構成』と題して編纂の基本的考え方・進め方が提起された。

・40周年シンポジウム…2008年5月31日

理系地区（旧工学部）本館大講義室で開催され約100名が参加。司会は平井孝治氏。「証言・ファントム墜落から機体引き降ろし、迷宮入りまで」と題して当時西日本新聞記者であった鈴木埜二・玉川孝道の両氏が報告。シンポでは芦刈茂氏（69年九大入学～農学部、セツルメント活動に従事。現在太宰府市長）、斎藤竜太氏（68年当時九大医学部、現在神奈川県勤労者医療生協・十条通り医院長）、古野隆雄氏（75年九大農学部卒、現在嘉穂郡桂川町にて有機農場経営）、堀内隆治氏（65年九大経済学部卒、68年当時同学大学院生、08年当時下関市立大学前学長）、山田俊雄氏（68年当時九大工学部講師、現在立命館大学名誉教授）が登壇。コーディネーターは黒田光太郎氏（68年九大入学～工学部、ベ平連運動を担う。08年当時名古屋大学教授）が務められた。

・50周年プレシンポジウム…2017年5月31日

シンポの1番目は「九大反戦の立ち上げと成果」と題して平井孝治氏が発表。世界初の原子力空母で米海軍第7艦隊に所属しベトナムへの攻撃に参加するエンタープライズ号が1968年1月佐世保港に入港するため現地では大規模な反対闘争が起きた。そのとき術後の身で駆け付け、機動隊に対しては無用な暴力の不行使を、市民に対しては機動隊の無用な暴力の行使を共に止めようと呼びかけ、機動隊と学生の間に入って最前線で訴えたのが平井氏である。このときの様子が「ただ一人」というタイトルで翌日の新聞に報道されている。直後の「朝日ジャーナル」2月11日号の倉田令二郎氏（当時九大工学部助教授、ベ平連運動を担う）の記事にも平井氏の武勇伝が紹介されている。シンポの2番目は「九大反戦と滝澤克己（68年当時九大文学部教授）」と題して堀内隆治氏が、3番目は「学生としての反戦青年委員会」と題して村岡五十次氏（68年当時九大法学部学生、現在県社会保険労務士会専務理事）が発表。三人の話から再確認できたのは、米軍機墜落による被害者としての九大ではなく、ベトナムを侵略する米軍を日本が支え、その日本を大学が支えるという構造を問うたことである。

1969年7月日本評論社発行の「日本の大学革命1…全国学園闘争の記録I…九州大学・米軍機墜落事件…闘いの経過と総括…九州大学全学共闘会議」では文末に「文責・堀内」とあるが、この人こそ当時九大反戦委の事務局長であった堀内氏である。私が在学時代「かつてノンセクトの反戦学連があった」という話をよく耳にしていたが、今回のテーマに九大反戦委が出てきたとき、その関連性がわからなかった。この記録によると「以下『我々』とは、(1968年)10月段階までは『九大反戦青年委員会』、以降は『反戦学生連絡会議』『全九大大学院闘争委員会(準)』を中心としたグループ総体をさす」とあり、「この時期いわゆる『反代々木』は自治会活動としては壊滅状態にあり、教職員、院生、生協労働者の反戦組織たる『九大反戦青年委員会』が学生を包摂して運動を指導せざるを得なかった。この『九大反戦』も(1968年)4月以来の打続く行動の中で組織的検討を迫られ、6月の『総会』で各層別『反戦』に移行すべきことを決定。7～9月期の『機体問題』の中でその思想的深化を迫られ、十二分な『総括』を経ぬままに、実体上は『反戦学連』『全院闘』『職員反戦』『病院反戦』に分化、止揚されている」とあり、卒業後41年目でやっとわかりました。

・2018年6月2日の50周年に向けて

「ファントム墜落50周年・さよなら箱崎キャンパス（案）」と題して記念誌を発行予定。ファントム墜落以降の世代の方でも構いませんので、経済学部時代の箱崎キャンパスの思い出など寄稿と協賛金をよろしくお願いします。

〈原稿〉A4用紙11ポイント横書き2400字程度

〈締切〉2017年12月25日（月）17時必着

〈郵送の場合〉〒812-0002

福岡市博多区空港前5-9-1-208

川本光治（元九大生協専務理事）宛

tel:090-5472-8956

〈Eメールの場合〉

ccchiaki24@aioros.ocn.ne.jp（坂井智明）

〈協賛金〉1口5千円。2口で1冊、3口で2冊贈呈。

寄稿者は1原稿5千円で1冊贈呈。

〈ホームページ〉

<http://ccchiaki24.wixsite.com/mysite>

リレー随想

大屋ゼミ、浜砂先生の思い出



大分大学経済学部教授

西村 善博氏

1979(昭和54)年卒

昨年12月3日、九州経済学会が経済学部で実施されたので、久しぶりに経済学部を訪問する機会がありました。経済学部棟の北側に見える野球場の光景は私が学部生から大学院生・助手時代を過ごした時（70年代後半から80年代中頃）とほとんど変わりがありません。それも見納めになりそうです。学会の最後の箱崎開催になったからです。

さて大屋ゼミでは本ゼミとサブゼミがあり、前者では大屋先生の下で経済関係の本を読み、後者では大学院生と学部生が一緒になり、院生の下で外書と統計書を読んでいました。最初の外書はJapanese imperialism todayで、田中角栄総理に関する記述や通産省の略称MITIなどに、妙に感じ入った覚えがあります。また、年2回のゼミ合宿がありました。九重共同研修所が多く、萩市の旅館や佐賀大の研修施設（唐津市神集島）にも出かけました。

合宿では、社会科学の古典を一冊読むのが恒例で

した。萩市の旅館では「よく勉強する」からと旅館のご主人から、お酒や菓子の差し入れをいただいたことがあります。「さすがは松陰の地である」という先輩院生の言葉が耳に残っています。佐賀大の研修施設は島中央部の小高い丘の上であり、その帰り、呼子でお祭りが開かれており、大綱引きに飛び入り参加したことがあります。九重ではゼミ後に、一目山（ひとめやま1287m）や久住山（1787m）に登るのが決りでした。前者は研修所の近くにあり、あっという間に頂上まで登った記憶があります。後者は牧ノ戸経由で研修所から往復5、6時間はかかり、登山道が雨でぬかるみ、靴が泥だらけになったこともありました。

浜砂先生とは、3年生の時、6月の合宿前に、大屋先生の研究室で、紹介されたのが初めての出会いで、いまも椅子に掛けられ、くつろがれていた姿が浮かびます。そのときは長崎大学に在職されていました。

合宿にもおいでになり、長いテーブルの端で、学生の報告を熱心に聞いていただき、大屋先生ないし浜砂先生のコメントでゼミが進行するというスタイルでした。浜砂先生から、3年生の終わり頃の合宿



1978年3月・九重
前列中央・大屋先生
後列左端・浜砂先生



1981年頃・佐賀大学の研修施設からの帰り
後列右から二人目・大屋先生

の時に、私の経済学の勉強が進んだと、褒めていただきました。褒められたのは後にも先にもその時くらいでしょうか。

先生は、私が大学院に進学した時に、経済学部に着任されたと思います。その時、大型トラックに満載された段ボール箱の搬入を手伝いました。本の量の多さには本当に驚かされました。確か、大屋ゼミ生が2、3名いた記憶があります。その日は先生のご自宅（千早）で、夕食をご馳走になり、先生のご家族にも初めてお会いしました。

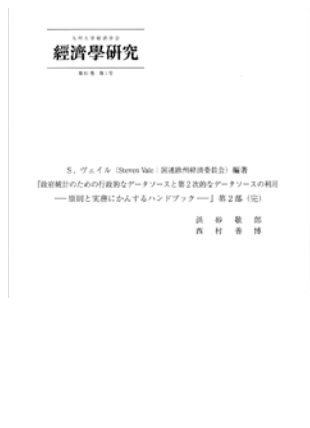
大学院生のとき、大屋先生のゼミでは、認識論に関する文献や、蜷川の統計利用論を読んでいたことが思い起こされます。浜砂先生のゼミでは、何を読んでいたか定かではありませんが、ゼミ終了後、箱崎浜の屋台に繰り出し、「ゼラチンの固まりだ」と豚足を強く勧められたことは印象深く残っています。

私が博士課程の時に、浜砂先生は、ドイツに留学され、留学先からドイツの国勢調査の中止に関する記事（確か西日本新聞に掲載されたと思う）を送ってくださり、それを読んだこともあります。その時から、浜砂先生はドイツの国勢調査問題を亡くなるまで追究されることになるわけです。

浜砂先生は、私が助手の時に、自宅に、朝早くおいでになったことがありました。論文の考察で頭が冴え、散歩していたら来ていたとのことでした。統計利用論に関する最初の研究の頃でしょうか。朝ごはんを食べながら執筆中の論文のことを熱く語って帰られました。

先生には、私が大分大学に赴任後も、科学研究費研究のメンバーに誘っていただき、先生が亡くなる直前の2013～14年には、先生の最後の刊行物になった翻訳作業に加わりました。

翻訳作業では定訳がなかったり、先生と私の文体の違いもあり、なるべく先生の訳語に合わせるよう調整してみましたが、それが難しい箇所もありました。訳語を含め、レジスター統計をめぐって聞きたかったことも残っています。それが叶わなくなってしまったことは残念としか言いようがありません。



(2014年6月30日発行の「経済学研究」に掲載された翻訳の別刷り表紙)

リレー随想

福岡VS熊本



前熊本市長
幸山 政史氏
1989(平成元)年卒

平成元年に卒業してから、早いものでやがて30年が過ぎようとしています。高校までは熊本で生まれ育ち、初めての県外でのひとり暮らし。田舎者でもありましたので、都会に馴染むまでには少し時間がかかりましたが、恩師や友人にも恵まれ、とても楽しい4年間を過ごしました。卒業後は東京本社の銀行に就職。最初の配属が天神にある福岡支店でしたので、学生時代から引き続き計6年半を福岡で暮らすことになりました。その後は東京の本社勤務が3年間、平成6年10月に熊本に戻った後は、現在までずっと生まれ故郷で暮らしています。

銀行員のあとの仕事は政治家。銀行を辞める際、上司に理由を説明すると「お前のようなやつは初めてだ」と呆れられ、30年ほど続く遠藤ゼミのOBの中では、政治家経験者はおそらく私だけのようです。以前ほどではありませんが、希少動物か絶滅危惧種のように見られることに、20年ほどの経験でずいぶんと慣れたような気がします。政治家といっても色々ありますが、私の場合は、平成7年4月から7年半は熊本市区選出の県議会議員、平成14年から12年間は熊本市長を務めました。その間でも特に熊本市長時代は、私にとっての第二の故郷であり、青春時代を過ごした福岡の動向が気になって仕方ありませんでした。

実は熊本の人たちは福岡にライバル心を抱いています。表に出さないかもしれませんが、腹の中では福岡が発展することを苦々しく思っている人は少なくないのです。“過去の栄光”ではありませんが、鉄道唱歌で熊本市が「九州一の大都会」と称されたように、官公庁や学校、民間企業までもが「九州の拠点」は熊本、そんな時代もありました。

それが旧帝国大学が母校の九州大学となり、博多港が整備され、新幹線の博多駅停まりの時代がしばらく続き、地下鉄の整備、福岡空港の国際化、ウォーターフロント開発、都市高速道路の建設等々、様々な要因が重なって、目覚ましい発展を遂げることにな

ります。私が卒業してからも、天神や博多、中洲川端等の中心部の再開発、郊外での宅地整備等、その勢いは衰えることはありません。福岡市の人口は熊本市の2倍強ですが、経済力ではその2乗か3乗、もっと開いてしまったかのような感覚です。福岡は熊本を追い抜くばかりか、はるか手の届かないところまで行ってしまった、だから熊本の人たちは福岡が妬ましいのです。

福岡のことを苦々しく、妬ましく思っている、私も含めて多くの熊本の人たちは福岡を訪れます。ショッピングや観劇、コンサート等、熊本に無いもの、熊本まで来ないものが福岡にはたくさんあります。私がそうであったように、学びや働く場、或いは様々な刺激を求めて、熊本の若者たちは福岡に移り住みます。福岡と比較しながら、「熊本には〇〇がない、〇〇が欲しい」と迫られたことは、数え切れないほどでした。平成23年には新幹線でつながったこともあり、福岡の動きはとでも気になりました。

そんな熊本にも福岡にないものがあります。それは街の真中にそびえる熊本城であり、上水道の100%を賄う豊富で清冽な地下水源。街中から車で10分ほど走ると蛸が乱舞するスポットがあります。熊本城や中心部のアーケード街では若者たちが主体となつてのイベントが四季折々に開催されています。まちづくりに参加しているとの手応えを感じるこの出来る“ほどよい規模の都市”なのかもしれません。これは決して負け惜しみではありませんよ。

新幹線開業の翌年、熊本市は北九州市、福岡市に次いで、九州で3番目の政令指定都市に移りました。新幹線開業を契機に、関西の三都物語ではありませんが、鹿児島市・福岡市とともに三市で観光プロモーションを仕掛けました。熊本市の政令指定都市移行を契機に、三政令指定都市で九州における大都市制度の研究に取り組みました。道州制が現実味を帯びているわけではありませんが、地方銀行の再編に象徴されるように、県境の線が薄くなってきているのも現実です。言わば“競争と連携”の時代に、私は自治体経営を担わせてもらいました。

青春時代を福岡で過ごした者が、そんなことを考えながら熊本で政治家という職業に就いてきました。今も時々福岡の街を歩きながら熊本のことを考え、熊本の街を歩きながら福岡のことを意識している自分がいます。そんな癖が体に染み付いて離れないようです。

発展の一つの過程なのかもしれませんが、六本松に教養部が無くなったことは寂しい限りです。学舎



1988(昭和63)年4月(箱根)
遠藤ゼミ合宿。前列左端が筆者。左から4番目が、
来年3月退職予定の遠藤先生。左後方は芦ノ湖遊覧船。

だけでなく、よく通った焼き鳥屋やビリヤード場等も姿を消し、昔の面影はほとんど残っていません。ただ、4年間暮らした草ヶ江のアパートは今もそのまま、バイトをしていた定食屋は大濠に移転した後も、以前とほぼ変わらぬメニューでお店を開け続けておられました。伊都の新キャンパスにはまだ足を踏み入れていません。温故知新ではありませんが、いつか行ってみようと思います。

2018年秋、伊都キャンパスへの移転完了に伴い、九州大学百年の歴史と営みを写真で振り返ります。

【全7回】

- ① 2017.10.1~11.12
九州大学の百年 戦中・戦後編
- ② 2017.11.14~12.27
九州大学の百年 戦前・戦中編
- ③ 2018.1.5~2.12
箱崎キャンパスの風景
-柱木勝彦写真展 vol.1
- ④ 2018.2.14~3.29
箱崎キャンパスの風景
-柱木勝彦写真展 vol.2
- ⑤ 2018.4.3~5.13
箱崎キャンパスの風景
-柱木勝彦写真展 vol.3
- ⑥ 2018.5.15~6.28
九大1968-林給治男の写真で振り返る
- ⑦ 2018.7.2~7.31
ありがとう箱崎キャンパス ダイジェスト



ありがとう

箱崎キャンパス

写真展

2018年秋、九州大学箱崎キャンパスは、その100年余の歴史に幕を下ろします。

このキャンパスで、多くの人が学びの時間を紡ぎました。その営みを支えてくれた箱崎の地、そして地域のみならずへの感謝の気持ちを込めて。

会期 2017年10月1日(日)~2018年7月31日(火)【全7回】 12:00~14:00(入場無料) ほか、他館へ移動する場合があります。

平日 8:00~22:00 **土日祝日** 10:00~18:00

場所 九州大学中央図書館3階(福岡市東区箱崎6-10-1)

主催：九州大学 附属図書館・大学図書館・文学部 協力：九州大学文学部歴史編集室

お問合せ：九州大学中央図書館利用支援課
tel. 092-642-2533 e-mail: tousiryou@jimu.kyushu-u.ac.jp
https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/events/hakozaki

入場無料

人物往来 ～新教員紹介



よう 葉 聰明 教授

【担当講義】

学部「企業経済学」
学府「企業経済分析特研」
Topics in Economics
(Business Economics)

【自己紹介】

2017年4月に経済学研究院に着任しました葉聰明と申します。台湾出身で、政治大学商学部を卒業したあと、来日して筑波大学で経営学の博士号を取得しました。大阪や台湾の大学でそれぞれ数年間勤務したあと、2017年3月まで秋田県にある国際教養大学に11年間勤めていました。

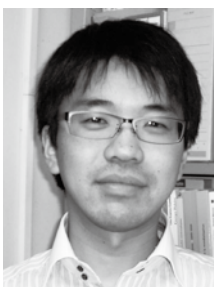
福岡に居を移してから、街中で観光客を含め外国人をよく見かけることがあり、国際化が進んでいる都市だと感じました。また、台湾と地理的に近いこともあり、観光、行政やビジネス等の面においても福岡と台湾との交流が盛んに行われていることを嬉しく思っています。

研究においては企業買収・防衛策や企業統治など

が専門分野であり、企業データを用いた実証分析を行っています。企業の様々な行動を経済学の理論によってその便益とコストを分析したうえで、それが企業価値にどのような影響を与えているのか、実証的エビデンスをもって明らかにします。

一例を挙げますと、近年、投資ファンドという機関投資家が日本での存在感を増すようになり、企業買収、議決権行使や株主提案などといった手段で企業の経営に介入していますが、それをどのように評価すべきなのでしょうか。ジャーナリスト的な報道や感情論的な批判ではなく、客観的なデータ分析に基づくエビデンスの提示が不可欠です。

教育においても経済学の理論を重視しながら、企業経営に関する諸課題についてデータ分析と実証研究に重点を置きたいと考えています。理論と数量分析の両面でバランスのよい専門スキルを兼ね備えた人材の育成を目標に努力していきたく思います。さらに、外国人教員ということもあり、日本人学生が国際的な視野を広め、国際感覚を身に付けるような教育を行うべく、微力ながら貢献していく所存です。



あいか 豊 准教授

【担当講義】

学部「経済・経営学演習」
「経済・経営学基本演習」
「外国書講読(英語経済)」
学府「産業配置特研」

【自己紹介】

2017年4月に着任いたしました與倉豊と申します(與倉は「よくら」と読みます)。私は、東京大学にて学生時代を過ごし、6年間助教として勤めた後、静岡大学に転出し、本年度より九州大学に移って参りました。研究室の引っ越しが続いているため、研究で使いたい本が段ボールの奥底に埋まっているということも少なくなく、伊都キャンパスへの移転が迫る中で、家で保管している大量の段ボールを今、

開けてしまっても良いものか悩んでおります。

私の専門は経済地理学という分野で、そのなかでも産業集積論の理論的・実証的研究に取り組んでおります。これまで研究を進めていく上で、福岡との接点は非常に多くありました。新興工業地域の発展過程をテーマとした卒業論文作成の際には、九州経済調査協会において資料収集と聞き取り調査で大変お世話になり、5年ほど前にも九州半導体産業の調査において福岡を幾度か訪れました。最近では産業見本市や各種イベントなどにおける主体間の関係性構築にも関心があり、MICE振興に力を注いでいる福岡は重要な調査対象地域であり続けています。

鹿児島生まれということもあり、この4月よりスムーズに福岡での生活を始めることができました。日々の仕事をこなしながら、新米教員として九州大学での研究・教育に精進したいと考えております。皆様よろしくお願いたします。



山崎 大輔 講師

【担当講義】

学部「計量経済学Ⅱ」
「上級計量経済学」
「経済工学基本演習」
「経済工学演習」
学府「計量経済学特研Ⅰ・Ⅱ」

【自己紹介】

本年4月、経済学研究院に着任いたしました山崎大輔と申します。生まれは山形県です。2歳のときに父の転勤に伴い、暑いところで有名な埼玉県熊谷市に移り、ここで小・中・高と過ごしました。その後、一橋大学経済学部・一橋大学大学院経済学研究科に進学し、学部・大学院の合計9年間を東京で過ごしました。博士課程修了後、京都大学で1年間、学術振興会の特別研究員として研究を行った後、本学に着任いたしました。九州での生活は初めてですが、父の実家が山口県ですので、九州の福岡や鹿児島にも親戚がおります。これまでに何度か訪れる機

会があり、九州は身近に感じています。

専門は計量経済学です。時系列分析・パネルデータ分析の手法に関する理論的研究を主に行っています。実証分析を行う際には、経済データを用いた統計分析を行うこととなりますが、ここでの分析手法を改善することにより、更に精度の高い分析を行うことができるようになります。私が行っている研究は、実証分析を行う上で、様々な経済データの特性に応じた、より優れた分析手法を提案するものになっています。

近年、統計学・データ分析の重要性が高まっており、統計学や計量経済学の方法を理解し、様々なデータを用いて統計分析を行い、得られた結果を適切に解釈することができるようになると、社会に出た時に大いに役立ちます。このため、講義・演習においては、統計手法の理解のみならず、実証分析を行う方法や、コンピュータの統計ソフトを用いた実習にも重きを置いています。

これからも研究と教育に邁進し、九州大学の更なる発展に微力ながら貢献できるよう努力してまいります。今後ともよろしく願いたします。

経済学部名誉教授の会

第21回の九州大学経済学部名誉教授の会は、2017年4月8日（土）16時から19時まで、経済学部近くの「リーセントホテル」で開催されました。前回同様、大学文書館で仕事中的カメラマン・桂木氏が駆けつけて撮影して下さったので、綺麗な写真が得られました。添付した写真の方々が今回の参加者です。4月に研究院長に再任された磯谷明德先生が現役教授陣を代表して参加下さいました。名誉教授側は、木下悦二・秀村選三・市村昭三・川端久夫・津守常弘・原田溥・児玉正憲・逢坂充・近昭夫・矢田俊文・福留久大・丑山優・塩次喜代明名誉教授の13名が出席しました。

名誉教授の会の冒頭で、磯谷先生から、パンフレット「経済学研究院の現状と展望」に基づいて、経済学部・研究院の抱える課題について報告を頂きました。昨年から引き続き、全学的には、2018年秋までに伊都への移転を完了すること、それに合わせて新学部として「共創学部」創設が計画されていること。経済学部・研究院では、教員レベルと学生・院生レベル両面で、国内外の他大学との研究・教育交流の

制度化が進捗していること。文系学部の見直し、抜本的再編の要請を踏まえて、組織改編策を法文経教育四学部で練っていること、関連学界や同窓会の有識者に意見聴取を進めていることなどでした。

磯谷報告の後、暫く自由に談話を交わして、17時から名誉教授の方々の近況報告に移りました。木下先生が1920年12月10日生、秀村先生が1922年12月10日生で、2歳違いの同一誕生日で、今年暮れには97歳と95歳を迎えられます。今回は、秀村先生の御挨拶から紹介を始めます。「皆様に御目にかかり、嬉しく思っています。ことに木下先生が御元気で、コンピューターを駆使して外国の学界と論争されているのことも聞き、大変励まされています。私も何とか勉強を続けたいと思っています。」「ふりかえって思うと、九州大学は私にとって大変良い大学でした。九大は法文学部の伝統があったからでしょうか、わりに自由に他学部の講義も聴けて単位になったりして良かったように思います。私の経済学の単位は少数で何とか卒業しましたが、私の兄貴分の都留大治郎さんが『秀村は経済学部の身体障害者だか

ら優しくしてやってくれ』と言われるほどで、経済学を余り知らずに特研究生（大学院特別研究生）になり、有難く思いました。そのような秀村先生の「一、幼いころ・小学生」から「九、九大経済学部助教授就任」までを綴られた[回顧録]「戦中派学生から日本社会経済史研究への道」（大阪経済大学・日本経済史研究所『経済史研究』第20号、2017年1月発行、所収）抜刷を配布頂きました。木下先生の健闘ぶりは、秀村先生の言及通りですが、変転極まりない世界経済については各方面から木下見解を求める声が続いております。2014年6月には東京の研究者グループに誘われて、明治大学で「二一世紀世界経済の暁鐘——今次金融危機が孕む問題点」について学術講演を行われました。その一部分は、昨年愛弟子・田中素香さんの記念論集に「アメリカ資本主義の構造変化について」（中央大学『経済学論纂』第55巻第5・6合併号、所収）として公表されました。

大正生まれ3人組のおひとり、連年出席されていた大屋祐雪先生が、検査入院と重なり欠席だったのは寂しいことでした。大屋先生は、その後、リハビリテーション病院に暫く入院、特別悪いところはなく、現在は、自宅で読書と執筆に勤しまれ、週2回ほどリハビリに通っております。

昭和一桁組の先生方も従来通り各々の道に勤しまれる毎日のようです。市村先生は、学生時代から経営学と聖書学の二足の草鞋を履いておられたのを、近年は聖書研究に一本化、教会活動およびその一環として同人誌「南の風」の編集刊行に励んでおられます。この初夏、秀村先生の「明治の男の信仰告白」「母の誕生日」、市村先生の「御霊の執り成しのうめき——ロマ書第8章から——」が収められた「南の風」138号を頂き、参加の皆様には配布いたしました。川端先生は、永年の課題がようやく結実、『日本におけるバーナード理論研究』として刊行され、肩の力が抜けた感じだと仰います。マルクスを表に出すことなくマルクス理論でバーナードの核心を突く超絶技巧を発揮された川端先生ならではの心境が偲ばれます。津守先生と原田先生は、九大定年後同じ九州情報大学で研究会をともにされた仲ですが、先に奥様を失われた津守先生が痛手を補うかの如く研究書の発刊を計画中、九大で優秀な若手研究者に出会えたことを喜んでおられます。津守門下のお一人、京大に移られた徳賀芳弘教授が本号「健筆模様」に活躍の一端を披歴して

下さいました。原田先生は、長く続く奥様の介護生活を通じて、日本の医療制度が高齢者に優しくないことを痛感しておられます。そういうなかで、集めた文献・資料を読み、書き溜めたメモやノートを整理して何とか形にしたいと研鑽の日々を過ごしております。児玉先生は、元気一杯、顧問として学会の発展に目配りされるとともに、「健康で快適に」を目標とした生活に打ち込んでおられます。逢坂先生は、昨年10月27日の高木幸二郎先生の祥月命日に富士山麓の霊園に門下生一同でお参りされ、富士五湖を巡る観光を楽しまれた由、若者の如く澁瀨と話しておられました。

昭和二桁組では、近先生が地元の筑紫野市で「よい映画を見る会」や「九条の会」の地域活動に参加、日米地位協定や沖縄米軍基地の理不尽に憤っております。同時に相変わらず現代史の大著読破を楽しんでおります。矢田先生は、半世紀の「知的労働」の結実として4巻6冊構成の矢田俊文著作集を刊行中、目下第3巻5冊目の『国土政策論』（下）「国土構造構築編」を書きおろし中。大学評価機構や公立大学協会の関係者として多忙のなか驚異の筆力を発揮しております。丑山先生は、九州情報大学でなお現役として経営財務論の研究教育を担っております。多彩な社会活動も丑山先生の特徴で、深町先生入居の老健施設の理事を兼任、深町先生の闘病模様など報告して下さいました。塩次先生は、第二の職場・福岡女子大での定年を迎え、教育の義務を解かれて研究専念、塩次経営学の集大成に赴かれる模様です。

福留は、秀村先生の発案で、名誉教授の会の「1968～70年・九大闘争＝紛争」記録係に指名されたのですが、来年のファントム墜落50周年に向けて何か形にしたいと考慮中です。

福留久大・記（2017.9.15）



前列左から3番目磯谷明德研究院院長を挟んで、右より、川端久夫、秀村選三、木下悦二、市村昭三の各名誉教授。後列右より、福留久大、近昭夫、矢田俊文、塩次喜代明、津守常弘、原田博、逢坂充、児玉正憲、丑山優の各名誉教授。

九州大学経済学部 国際学術交流振興基金執行状況報告（平成28年度）

国際交流委員会委員長を拝命してから、平成29（2017）年4月より2年目の任期に入りました。経済学研究院の天下と申します。今年度も、どうかよろしくお願ひいたします。さっそくですが、昨年に引き続き、経済学部国際学術交流振興基金の執行状況につきましてご報告させていただきます。

同窓会の皆様を中心にご寄付を頂いた資金は、30有余年の間「国際学術交流振興基金」として経済学部における国際学術交流のための基盤を形成してまいりました。改めて心から感謝申し上げます。

さて、別表にありますように、平成28（2016）年度もまず、毎年恒例の三大学（中国人民大学、南京大学、九州大学）ジョイント・カンファレンスの第11回大会を中国人民大学で開催し、基金をその開催・運営の諸経費の一部として充当させていただきました。さらに、平成29年3月にはその中国人民大学から代表団が来日し、ダブルディグリー・プログラムの説明会を開催し、さらに今後の国際交流の在り方について協議を行いました。その時の会議費として本基金から支出させていただきました。お蔭様で、来年、このプログラムは創設から10周年を迎えることになりました。

次に平成30（2018）年度から学部の国際コース（略称GProE）のプログラムが開始する予定になっていますが、その中の短期の語学研修先候補であるオーストラリアのプリズベンにあるクイーンズランド大学へ視察に行つて参りました。その時の土産代として基金を利用させていただきました。

また海外在住研究者の招聘の件では、昨年度に続き、ウィーンからアンヌ・ダルシ先生（ウィーン経済大学教授）とトマス・パイファー先生（ウィーン大学教授）を招聘し、先生方のご専門である財務会計や管理会計、さらにマネジメント・コントロールなどの領域で、ワークショップでの報告や本学教員の研究に対するコメントや情報提供をしていただきました。また、これとは別に国際交流研究成果の刊行費用（英語論文の校閲）としても1件利用させていただきました。

最後に、九州大学カリフォルニアオフィスでの英語プログラム10周年記念イベントに対して、そのプログラムに経済学部の学生が多数お世話になっていることから、その記念イベント開催経費に対しても25万円ほどを支出させていただきました。

言うまでもなく、本基金は、皆様から頂いた貴重な財産であり、可能な限り持続可能な形で使わせていただく所存です。経済学研究院においても、来年度に迫ってきた伊都キャンパスへの移転を契機に、これまで以上に教育研究の国際化が重要な戦略課題となっており、今後とも使途を吟味しながらも有効かつ有益な形で本基金の活用而努力していきたいと思っています。同窓会の会員の皆様へは、今後とも一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

【国際交流委員会委員長 大下 丈平】

申請者	内 容	期 間
【 交流協定大学・機関との交流促進費 】		
大下 丈平（教授）	※共同シンポジウム開催 第11回3大学ジョイントカンファレンス（九州大学・中国人民大学・南京大学）開催	28.10.13 ） 28.10.15
【 海外在住研究者招聘 】		
潮崎 智美（准教授）	※国外からの招聘：ウィーン経済大学教授 Anne d'Arcy ：ウィーン大学教授 Thomas Pfeiffer 研究大学強化促進を目的とした、ワークショップでの報告、国際学術雑誌の投稿に関するレクチャー、本学教員の研究に関するコメントや情報提供 （平成28年度に発生する費用について、国際学術交流振興基金より支出）	28.3.21 ） 28.4.4
【 国際交流研究成果の刊行 】		
篠崎 彰彦（教授） 浦川 邦夫（准教授）	論文“Does mobile phone improve per-capita income?”の英文校閲	

【 国際シンポジウム開催費 】		
大下 丈平 (教授)	※国際シンポジウム開催 中国人民大学代表团が来日し、DDプログラムの説明会および今後の九大との国際交流について協議	29.3.15 } 29.3.18
【 国際交流に伴う物件費 】		
大下 丈平 (教授)	※記念品作成費等 (九大記念品) オーストラリアのThe University of Queenslandを訪問する	29.3.19 } 29.3.24
【 その他 】		
	カリフォルニアオフィス英語プログラム10周年記念イベント開催に係る経費負担	28.9.22

平成28年度卒業生就職状況

平成29年3月31日現在、()は女子で内数

学 部		就 職 先		就 職 先	
就 職 先	人数()	就 職 先	人数()	就 職 先	人数()
EH	1 (1)	鹿児島市役所	1	第一生命保険	1
H.I.S	1 (1)	ガスパル	1	大正製薬	1
IHI	2	兼松	2	大和証券	2
JAむなかた	1	監査法人トーマツ	2	タカギ	1
JA鹿児島県連	1	北九州市役所	1 (1)	デンヒチ	1
JA全農ミートフーズ	1 (1)	吉備中央町役場	1 (1)	東亜建設工業	1
NOK	1	九州経済産業局	1 (1)	東京海上日動火災保険	4 (2)
NTTドコモ	2	九州大学	1	凸版印刷	2 (1)
NTT西日本	2	九州地方整備局	1	トヨタ自動車	4 (3)
SMBC日興証券	1	九州電力	1 (1)	トヨタ自動車九州	1
Speee	1	クマヒラ	1	トライアルカンパニー	1
TOTO	1	黒崎播磨	1	西日本シティ銀行	5 (1)
あいおいニッセイ同和損害保険	2 (1)	国際協力銀行	1	西日本総合リース	1
アクセンチュア	2	コスモス薬品	1	西日本鉄道	2 (1)
アシックス	1	コロプラ	1	日本アクセス	1
有限責任あずさ監査法人	2	サイバーエージェント	3 (2)	日本オラクル	1
穴吹工務店	1 (1)	西部ガス	1	日本政策金融公庫	1
アビームコンサルティング	1	佐賀県庁	2	日本政策金融国庫	2
イオン九州	1	サガテレビ	1	日本曹達	1
いすゞ自動車	1 (1)	新日鐵住金	1 (1)	日本年金機構	1
イズミ	2 (1)	秀英予備校	1	農中情報システム	1
伊藤忠エネクス	1	商船三井	1 (1)	農林中央金庫	1
エノテカ	1	親和銀行	1	野村證券	1
愛媛県庁	1	住友化学	1	ハウステンボス	1 (1)
大分キャンオン	1	住友金属鉱山	1	白泉社	1
大分県庁	2	セキスイハイム九州	1 (1)	パナソニック	1
大野城市役所	1	セブテーニ・ホールディングス	2	阪急オアシス	1 (1)
オービック	1	セブン・イレブンジャパン	1	ファイイズ	1
岡山県庁	1	全日本空輸	1	福岡銀行	6 (1)
鹿児島銀行	1	損保ジャパン日本興亜	1 (1)	福岡空港ビルディング	1
		第一精工	1	福岡県庁	3 (1)

就 職 先	人数()
福岡高等裁判所	1
福岡国税局	1
福岡財務支局	2
福岡市役所	3 (3)
福岡値書	1 (1)
富士ソフト	1 (1)
フリークアウト・ホールディングス	1
みずほ証券	1
三井住友海上火災保険	2 (1)
三井住友銀行	2
三井住友信託銀行	2 (1)
三井住友建築	1
三井倉庫九州	1
三菱UFJ信託銀行	1
三菱ガス化学	1
三菱東京UFJ銀行	1
三菱日立パワーシステムズ	2
門司税関	2 (1)
諸井会計	1
山口県庁	1 (1)
山口フィナンシャルグループ	4 (3)
大和ライフネクスト	1
ヤマハ発動機	1
ゆうちょ銀行	1 (1)
りそな銀行	2 (1)
レオパレス21	1
レバレジーズ	1
労働基準局	1
ワークスアプリケーションズ	1
総 計	168(43)

修士課程(学府)	
就 職 先	人数()
MSソリューションズ	1
NHN comico	1 (1)
OPT	1
PwCあらた監査法人	1
S Gホールディングス	1 (1)
UACJ	1 (1)
アイ・シー・ネット	1
麻生	1
麻生塾	1
イオン九州	1
伊藤忠テクノソリューションズ	1
井上産商	1
エーエヌディー	1 (1)
エーザイ	1
春日市役所	1
北九州エル・エヌ・ジー	1
九州観光推進機構	1 (1)
九州旅客鉄道	2
久留米商工会議所	1
久留米大学	1
航空自衛隊	1 (1)
交通銀行	1
コカ・コーラウエスト	1
国立病院機構	1
サニックス	1
サフランアソシエイツ	1
シンプレクス	1
すがはら病院	1 (1)
西部技研	1
第一精工	1
ダノンジャパン	1
中国対外経済貿易信託	1
ティー・アール・イー	1
テノホールディングス	1
凸版印刷	1
トヨタ自動車九州	1
ドリス	1
長崎大学	1 (1)
西日本シティ銀行	1 (1)
西日本設計工業	1
西日本鉄道	1 (1)
ニッセイ情報テクノロジー	1
ニトリ	1 (1)
日本オラクル	1

就 職 先	人数()
日本政策投資銀行	1
日本能率協会	1
博多大丸	1 (1)
長谷川水産	1
パナソニック	1
パンダタクシー	1
日高法務事務所	1
富士通	2 (1)
富士通BSC	1 (1)
マイナビ	1 (1)
みずほ銀行	1
三井物産	1
ミドリ印刷	1
やずや	1 (1)
山内学園	1
ローソン	1 (1)
ワークスアプリケーションズ	2 (1)
総 計	64 (18)

九州大学同窓会連合会との覚書の締結につきまして

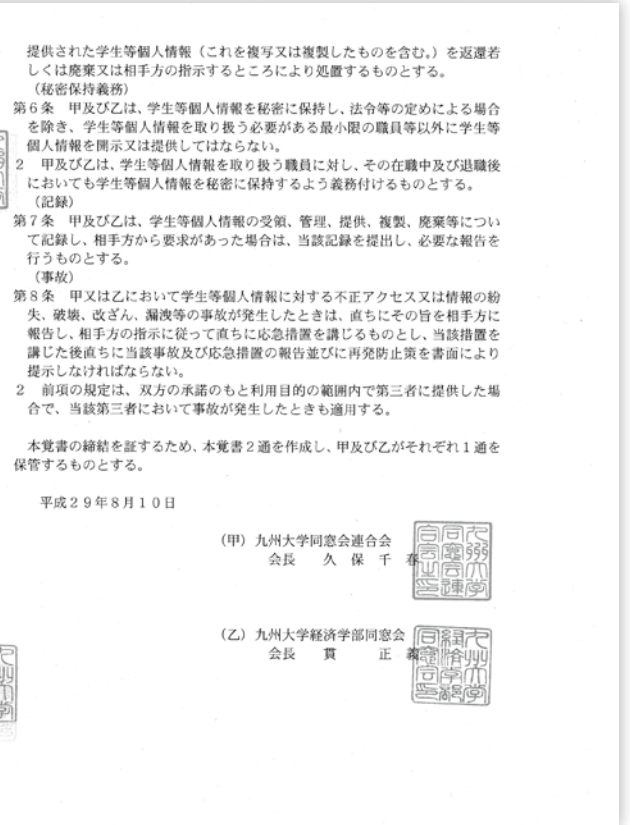
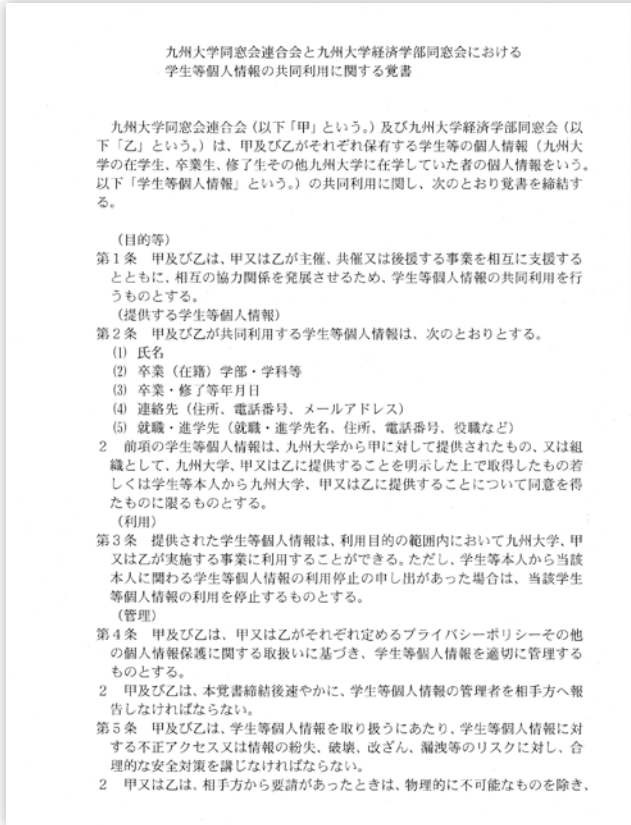
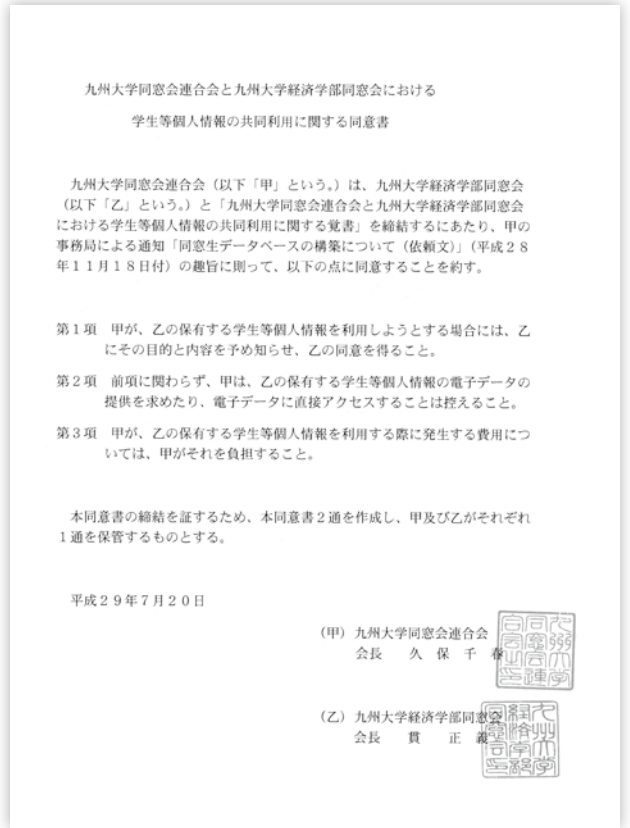
同窓会長 貫 正義

九州大学経済学部同窓会は、平成29年7月7日の総会（於：学士会館）におきまして、学生等個人情報の共同利用に関する覚書を九州大学同窓会連合会と交わすことを決定いたしました。これは、九州大学同窓会連合会が2年越しで締結を本同窓会へ呼びかけていたもので、学内理事会と全国理事会で数度にわたり御議論いただき、上記総会にて御承認を得たものです。この度締結手続きを終えましたので、ここに御報告申し上げる次第です。

御覧いただくとお分りの通り、この覚書は九州大学経済学部の在學生と同窓生の個人情報を両者で共有・利用しようとする協定内容となっています。もちろんプライバシーポリシーに則ったものではありませんが、本同窓会の従来の運営方法に鑑み、この覚書によって将来の活動と運営に支障となるような事態が生じては本末転倒となりますので、それを未然に防ぐべく、覚書締結と同時に確認書を取り交わしました。

両文書により、今後経済学部同窓会は、九州大学および九州大学同窓会連合会と十全な協力体制を敷くことができると信じます。以下に覚書と確認書とを掲げますので、同窓生の皆様にはよろしく御確認、御了承ください。

本同窓会の運営につきまして、皆様のいっそうの御協力をお願い申し上げます、以上覚書締結の御報告といたします。



九州大学経済学部同窓会役員名簿

(カッコ内は卒業年次～昭和、ただしHは平成) 2017年9月

役員	氏名							
会長	貫 正義(43)			古賀 英基(53)	境 正義(53)	吉元 利行(53)		
副会長	秦 喜秋(43)	小森田憲繁(46)		小川 重巳(54)	川原 晃(54)	嶋田 正明(54)		
事務局長	藤井 美男(55)			三浦 正(54)	平井 彰(55)	藤本 淳一(55)		
監事	貞刈 厚仁(52)	柴田 祐二(59)		池上 恭子(56)	窪田 秀樹(56)	富山 幸三(56)		
顧問	大屋 祐雪(26)	淵上 敏晴(29)		道永 幸典(56)	米村 健史(56)	片山 基之(57)		
	福岡 道生(30)	森山 靖章(30)		楠 雅之(57)	高木 直人(57)	川上 寛(58)		
	鈴木多加史(33)	進谷 庸助(35)		村上 英之(58)	柴田 祐二(59)	友池 精孝(59)		
	石橋 英治(36)	池田 弘一(38)		橋本 上(59)	吉留 郁(59)	斉藤 浩志(60)		
	檀 豊隆(40)	初井 勝人(40)		廣川 昌哉(60)	田中 和教(61)	成宮 正和(61)		
(理事)				齊藤久美子(62修士)	高本 英一(62)			
本 部	貫 正義会長	藤井美男事務局長		大坪 勇二(63)	箴島 修三(H元)	清丸 泰司(H2)		
	丑山優名誉教授	深川博史教授		田川 真司(H2)	山崎 正良(H2)	北村 英照(H3)		
	大石桂一教授	鷲崎俊太郎准教授		谷村 信彦(H3)	林 秀信(H3)	尾花 研(H4)		
大 学	磯谷明德研究院長	清水一史教授		川島 満(H4)	権藤 健太(H4)	重吉 二憲(H4)		
東京支部	秦喜秋支部長	杉哲男副支部長		中村 昌子(H4)	松延 篤(H4)	池田 泉(H5)		
	伊東信一郎副支部長			宇出 研(H5)	原山 泰之(H5)	向 勇一郎(H5)		
	吉元利行事務局長			角 聡(H6)	山崎 浩(H7)			
関西支部	小森田憲繁支部長	太田光一副支部長		上田 純也(H8修士)				
	中野光男副支部長	谷村信彦事務局長		沖本 浩司(H8)	竹下 将史(H8)	手嶋 秀幸(H8)		
福岡支部	貫正義支部長	貞刈厚仁副支部長		平山浩一郎(H8)	藤川 昇悟(H8)	渡邊 正司(H8)		
	平井彰副支部長	村上英之副支部長		松田 和俊(H9)	仲 義雄(H10)	宮崎 真吾(H11)		
	高木直人副支部長兼事務局長			安藤 大輔(H12)	濱田 貴将(H12)	岩貝 和幸(H15)		
(評議員)				青柳 未央(H16)	森 大輔(H16)	土公 文平(H17)		
	秀村 選三(22)	大屋 祐雪(26)	江藤 正憲(27)	宮本 傑(H17)	稲波 祥子(H18)	小林 秀章(H18)		
	棚倉 亨(27)	井原 伸允(28)	高岩 淡(29)	伊藤 健司(H19)	亀井 祐輔(H20)	首藤 洋志(H22)		
	淵上 敏晴(29)	山本 和良(29)	福岡 道生(30)	秋山 卓哉(H24)	北山 隆之(H24)	竹之下一也(H24)		
	森山 靖章(30)	濱口 廣海(31)	鈴木多加史(33)	中村 龍太(H24)	水田 晃斉(H24)	倉岡慎之介(H25)		
	江口 傅(34修士)	真藤 乃輔(34)		中野さゆみ(H25)	西原 貴史(H26)	上妻 諒子(H27)		
	麻生喜久男(35)	進谷 庸助(35)	三輪 晴治(35)	嶋田 直人(H27)	美川 優太(H28)			
	石橋 英治(36)	山道 茂樹(36)	箱島 信一(37)	市村 昭三(元教官)	清水 一史(現教員)			
	池田 弘一(38)	佐野 壬彦(38)	檀 豊隆(40)					
	松浦 哲也(40)	初井 勝人(40)	沖 弘隆(41)					
	安陪 義宏(42)	平本 公雄(42)	右田 喜章(42)					
	秦 喜秋(43)	杉 哲男(43)	寺原 義之(43)					
	貫 正義(43)	跡部 千春(44)	一丸 孝憲(44)					
	今井 俊之(44)	鶴川 洋(45)	森 恍次郎(45)					
	青柳 泰教(46)	太田 光一(46)	小森田憲繁(46)					
	吉井 勝敏(48)	伊東信一郎(49)	岩崎 俊彦(49)					
	久保 隆二(49)	園田 一蔵(49)	加藤 孝典(50)					
	佐藤 敏弘(50)	富井 順三(50)	中野 光男(50)					
	石田 光明(51)	古賀 英樹(51)	中野 善文(51)					
	光富 彰(51)	工藤 重之(52)	貞刈 厚仁(52)					
	志村 恭子(52)	綾部 正博(53)	岡田 裕二(53)					

各支部の役員

東京支部.....

支部長 秦 喜秋(43)

副支部長 杉 哲男(43) 伊東信一郎(49)

顧問 淵上 敏晴(29) 福岡 道生(30)
池田 弘一(38) 初井 勝人(40)

監事 今井 俊之(44) 富井 順三(50)

理事 高岩 淡(29) 三輪 晴治(35)

箱島 信一(37) 濱田 貴将(H12)

岩貝 和幸(H15) 青柳 未央(H16)

土公 文平(H17) 宮本 傑(H17)

稲波 祥子(H18) 小林 秀章(H18)

	亀井 祐輔(H20)	首藤 洋志(H22)	安陪 義宏(42)	平本 公雄(42)
	秋山 卓哉(H24)	北山 隆之(H24)	右田 喜章(42)	寺原 義之(43)
	竹之下一也(H24)	中村 龍太(H24)	貫 正義(43)	一丸 孝憲(44)
	水田 晃斉(H24)	倉岡慎之介(H25)	鶴川 洋(45)	森 恍次郎(45)
	中野さゆみ(H25)	西原 貴史(H26)	青柳 泰教(46)	吉井 勝敏(48)
	嶋田 直人(H27)	上妻 諒子(H27)	岩崎 俊彦(49)	加藤 孝典(50)
	美川 優太(H28)		石田 光明(51)	古賀 英樹(51)
事務局長	吉元 利行(53)		光富 彰(51)	工藤 重之(52)
事務局次長	川原 晃(54)	大坪 勇二(63)	貞刈 厚仁(52)	志村 恭子(52)
	林 秀信(H3)	原山 泰之(H5)	綾部 正博(53)	岡田 裕二(53)
	伊藤 健司(H19)		境 正義(53)	小川 重巳(54)

関西支部.....

支部長	小森田憲繁(46)		*嶋田 正明(54)	*三浦 正(54)
副支部長	太田 光一(46)	中野 光男(50)	*平井 彰(55)	*藤本 淳一(55)
顧問	鈴木多加史(33)	石橋 英治(36)	池上 恭子(56)	*道永 幸典(56)
	佐野 壬彦(38)	檀 豊隆(40)	窪田 秀樹(56)	米村 健史(56)
事務局長	谷村 信彦(H3)		楠 雅之(57)	*高木 直人(57)
事務局長代理	清丸 泰司(H2)		*村上 英之(58)	*柴田 祐二(59)
会計	佐藤 敏弘(50)		友池 精孝(59)	橋本 上(59)
監事	久保 隆二(49)		吉留 郁(59)	*廣川 昌哉(60)
	※以上の方は理事を兼任。		田中 和教(61)	成宮 正和(61)
理事	江藤 正憲(27)	棚倉 亨(27)	高本 英一(62)	*箴島 修三(H元)
	濱口 廣海(31)	山道 茂樹(36)	*田川 真司(H2)	山崎 正良(H2)
	松浦 哲也(40)	跡部 千春(44)	尾花 研(H4)	*重吉 二憲(H4)
	園田 一蔵(49)	中野 善文(51)	中村 昌子(H4)	*池田 泉(H5)
	古賀 英基(53)	富山 幸三(56)	宇出 研(H5)	*角 聡(H6)
	片山 基之(57)	川上 寛(58)	*山崎 浩(H7)	*沖本 浩司(H8)
	齊藤 浩志(60)	齊藤久美子(62修士)	竹下 将史(H8)	手嶋 秀幸(H8)
	北村 英照(H3)	川島 満(H4)	渡邊 正司(H8)	*松田 和俊(H9)
	権藤 健太(H4)	松延 篤(H4)	仲 義雄(H10)	*宮崎 真吾(H11)
	向 勇一郎(H5)	上田 純也(H8修士)	*安藤 大輔(H12)	*森 大輔(H16)
	藤川 昇悟(H8)	平山浩一郎(H8)		

福岡支部.....

支部長	貫 正義(43)	
副支部長	貞刈 厚仁(52)	平井 彰(55)
	村上 英之(58)	
副支部長兼事務局長	高木 直人(57)	
監事	森 恍次郎(45)	三浦 正(54)
評議員 (*は運営委員)		
	秀村 選三(22)	大屋 祐雪(26)
	井原 伸允(28)	山本 和良(29)
	森山 靖章(30)	江口 傅(34修士)
	真藤 乃輔(34)	麻生喜久男(35)
	進谷 庸助(35)	沖 弘隆(41)

名古屋地区	板山 和弘(54)	
広島地区	佐藤 敬(23)	白石 順一(34)
大分地区	高山泰四郎(39)	

九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)
 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)
 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)
 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)
 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)
 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)
 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)
 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)
 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)
 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)(2期6年)
 第11代 貫 正義氏 (平成26年7月7日～)

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- | | | |
|-------|------|------------------------------|
| ①終身会費 | 一括 | 45,000円 |
| ② | 〃 | 3分割 15,000円×3回 (1.5年間で納入完了) |
| ③ | 〃 | 6分割 7,500円×6回 (3年間で納入完了) |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ (11回・49,500円の納入で完了) |

◎平成18年（2006年）3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、平成29年9月30日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更がございましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。



九州大学経済学部同窓会事務局 （開室：平日の月・火・木・金 10時～17時）

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学経済学部内

TEL 092-642-2442 / FAX 092-642-2348 / E-mail : dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp

経済学部同窓会ホームページ <http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4>

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。
 適当なものがございましたら事務局までご連絡下さい。